新續古今和歌集 上

九曜文庫

新續古今和歌集序

天成地定人言之文斯明古往今来風聲之體屢改若夫長歌短歌之異曲五字七字之同工旋巧之有餘混牽之不足是雖以似分於歩驟皆莫不發諸性情然而聲成文於五音言寄眺於六序彼句數之有合實物理之自然是以出雲素之於前難波繼之於後養君德則有富緒河之什和王恩則有淺香山之篇或命小藤於殿築之中或頌南枝於氏姓之始蓋三十一字之作所以專盛而永傳也　平城天子詔侍臣撰万葉集以来集及二十紀逾六百雲箋霞翰則卷歷汗牛之書緗句繡章則光奪集捲鶴之玉璧於彌瑯挑筆而群英小郢逐提竹而找盡山中雖然言泉流於筆端酌而不竭思風發於胸次仰則彌高騰馥遺芳（方）紉霞披後世青藍寒水豈不洄然前緒古曰人丸既沒和歌不在於茲乎儀我斯言今國家膺中興之運同上古之風時有所尚孚群莫不趨者無貴無賤要免

播而之識一唱一和思德廣載之矣征夷大將軍
源朝臣左文右武之資懋南征北伐之績
不啻股肱于元首又毋於黎民文德回筆海
之例瀾舉藝苑之藻緒爰參千 朝言
史撰集者文思之標幟而今不然者已久矣
寧耶 明時之欽典于史是遂擇禁內便宜
之殿為和歌編撰之所延英令四位於芸
閣天曆置五人於梨壺又元久為羽離宮
文永於龜山仙洞已若合符契曷不資準
的耶 仍詔權中納言藤原朝臣雅世專

掌其事 論思獻納夙夜在公出入古今取
捨善惡經雖非青天之窺管累得滄海
之遺珠凡歷六年甫就一集春夏秋冬
之變風雲草木之興可以怨可以群可
以義可以刺藻麗者蕭散者巖密者行
餘者推而廣之不可詳悉上挹三代之餘
風下貽千載之偉觀故名曰新續古今和歌
集者也永享戊午八月下澣謹序

あめなりつちさゝゆりて人のしわさ
まことにたくりいふし人ゆきさまこさく
すそくまの阿そひゐえんせ中にやさしき
うさハ八雲ゐるりのちれらみえんそり一
りしともむそひそめしよりこのかた世と
わめ民とあそて色よ婚まりん紙の家
なかうちとしてこのはひよむまれと
むまま我くふてさくりいきこえ人
たかれもいやしきをはしなもなから
あるとまゝくゆすひあまねくりそ於

そのすとふるなしからまけま一八家
のちみなまおふえしとの万葉集とりめ
とりして永徳のりしこらしおほむ世まつさ
海まそおかやけしとにかすしつくえう
いあつめかしかれ亦あまり一ゐいり
あんなまてりけるこのはは微くふか式
みくりかか筆ハ子とみえすりりを
おかく家くよ流りまゐとのたく五乃車
まのすとえたりましむかはあまとかし
のいろくめいよくわさしとよれ

たやしこさまハ御ともしたけし花
よりをくれな井よおゐよりもかをさ
りのハこれ帝の見んちふなんかまけつ
こゝに神のさゝきしくふを御りり世を
うけ多りつ位よそれりてあめか志て
かまつのこさあやむらくしみむ聖なら
草木のきよりも志けく雲なら八かさ
らけきまつりしハ光ゆく月日のひかりを
ひろふくりろふしの三のまてし弐
五の見しとれ及をれらしぬまハわら八し

まつのうゑれかり御くをなひこさよ緑こ
きすとのふるす歌し志つのきなし沢
たのおかいまうちこさみ源のあそん公ひ
まとゑのしくろいくされさゝの流ゝさを
う称くかつさゆゝやすれのいとなみけ
きつりしとゝとこまれうらふめくし
おこと子さしれかりに志りそくつ見ち
ますてまへなこなりもしハ志てさ山
のしらなゝ忍志ハのかしなゝ秋の
せされとゆもしとゝ多すれ子すかれ

とふ日かけ多えて雪まのわかなつむよはま
さけなし浦ちゆへに宮内は山にこれ
我國なり志さしゆのたひきさとえと
志らしめむとおもひ子これ春秋に當我
世なりあはれしるの葉なりてさかむ
ことを祈ふこれによりて延喜の昔風の
風をもたらし天暦に梨壺のあとをも
むかしをおもふのことなす元久に鳥羽
のあとをさなり文永に亀山のよをひ
久しきためしとおもひめて権中納言

藤原朝臣雅世にかせて和哥のえらみ
よみへりにおほちら山のまつのけをしあけ
とみの河のなみにこまるとわかち見へ
まうれおしとゑえいそのへしむた
かれそ一人に勅すれといそれはふかき
かとを多つあかふみに時よのそこてられ
うつりのをえしふとくへともせにつて
そのあとをさとむかるすなしいまゆ後拾遺
金葉詞花千載これなり志るた新中納言
定家こそしめてあけちれのあとくとほき

て新勅撰をえらひてたてまつり前大納言
為家卿また三代にいたりて續後撰をえらひ
たてまつりしよりこのかたしきしまの道
たえせすいよ／＼ふち川のなかれたえは
あひうけて家風忘れすしと家のほまれ
みつからのたりしらは道をこそてかはらぬ
りしめたまきしよりそもして參議雅經
卿は新古今五人のえらひにくはゝる
うへこのみちにおもひて子もそへて七代
ますゝき葉乃ことをさしとゝめられ又一

まちかしにゐたるはとゝまりてかへりみんと
のこすらむよかしは御ことに時につけてとかく
かはるへきならへしおほよそ六とせの
春秋をおくりむかへて九重のあさゆふに
いて入たまふなきたまふまてすゑ志て王はひ
ろひのこせるうみもなく綾よ為し錦
をかさねあまゑせらそしつまおもし心乃
なよふ前とくとりしめかゝむせ
以上をも難波江の玉かしはにあふらつゆま
逢坂山のいさしろこうくれさうなり

ひぬつくとなれたり　かくて後はいまも
見えしさる所あれとかくしてとりえつへ
ほうら二千くあまり廿まきなんつけて
新續古今和歌集とよりし名をあらは
郭公とまちりみちをうたし寛紙なるも
まりえしめて君の御代といのりかけつる
法をゑらひ家これをかひよ別をおしと
いそのかみふるきよ葉をとめのひえめに見えぬ人を
こひおもふはくなる世をさとりもてよ
ちりの葉末とうつもれりのふよせて

ともの心ほしとみへもとしふすなし志
みちのおすいそし水のふれめ紙
たゆかぬ山も見えちらひとおふ
いく倦く君か時によせてさひおほり
ふまとふなさけ有うへし時に永享十
年八月廿三日になんしるしをかりぬる
この集にこれもいえひとれぬまとし
河竹のよの露霜とたてても花の
色かつすえの子か葉れなものかちかふ
ほかにさてもそのあとひさしくとまれ

らふおさか山のかくふくりあらむ人はふか
きみちの志るへとよろこひ玉津嶋のち
かふましをかの神は見えけむかりを
えはらめかる

新續古今和歌集巻第一

春哥上

百首哥の中に春の心をよみ侍ける

権中納言雅縁

春きぬといふより早くしるしとや空にへたてゝ立霞かな

立春氷といふことをよませ給ける

後小松院御製

志賀の浦やよせてかへらぬ浪のまに氷もとけて春はきにけり

庭知春といふことを

左大臣

やはらくる時に空にはまつ霞のやかて春と知らん

弘安元年亀山院に百首哥たてまつりける時春哥の中に

土御門入道前内大臣

春やまつ浪よりさきにこえぬらん霞そこゆる末の松山

題しらす

清原深養父

みよし野は山もみ雪は降しくは雲ちに春やまつこゆらん

正治二年後鳥羽院に百首哥たてまつりける

後京極摂政前太政大臣

春は猶あさまのたけにたえてくもる煙は雪けなりけり

山霧やと

従三位雅家

春霧や川も松の色あれハ形時しらぬ富士のしはやま

応永十四年内裏にて人々題をさくりて百首歌たてまつりけるにおなしを

鹿苑院入道前太政大臣

みよし山のもとさらに霞也春日の里は春のゆかの

百首歌よませさせられし時霞

尊承親王

まほろ朝雲のみとりもえなれや霞そ匂ふ天のかく山

永久二年内裡十首歌合に　小野経家

常盤井入道前太政大臣

ゆく分も雪ふれ葉色それなるに霞む住吉の松もむら立

文保三年後宇多院に百首歌たてまつりし時

春のうた

芬陀利花院前関白内大臣

一しほも深き緑あかぬ高砂の松の緑ハ霞なかゝきり

千五百番歌合に　藤原隆信朝臣

春きてハ人をも問つさみよしの雪よりふかき朝霞かれ

春歌の中に　前中納言定房

みよしの峯なる日に雪消て朝の原より霞たなひく

後深心院前関白太政大臣

いつまに立かさぬらん佐保姫の霞の衣ころもへて
延文二年百首哥たてまつりける時霞を
等持院贈左大臣
川浪を春にゆりて志か浦や水海遠く川霞かな
松なしるを
法印経賢
松原のみどりもやそこに霞むらん与謝の浦はの春の曙
題しらず
俊恵法師
おほろなる志らひゆくとをみ世ハ春の霞そ又立にける
建保三年名所百首歌奉りける時
前参議忠定

あしのやなたの志ほやに立煙わく春の夕霞哉
貞和二年光厳院に百首歌たてまつりけるに
中宮大夫公宗母
ゆくの戸や霞をわけてこゝろのいとも泣浪のよのくれ
家に歌合し侍りける時
後九条前内大臣
志ほのなる浪まはれけの遠きにほとゝめぬ霞あはし
ものゝ散て詞の書と合らまけける時なとを
春望と云ことを
参議雅経
みすむかり縁をみて海こそたかくるみ山の雲の中はに

従二位家隆

橋姫のかたしき袖やまつらん霞もしろきうちの川浪

嘉元ゝ年百首歌奉りける時霞を

前大納言経継

難波潟のあしのやへかき隔てあれゝ霞そ春は浦なみ

おなし心を

権中納言雅世

なにはかたしほやく煙立そひて霞もふかき浦風そふく

二品法親王覚助家五十首歌に浦霞を

大蔵卿重経

りかやく煙ハそれの浦風に春とや空の霞すむらん

後太大臣 長實 家にて歌合し侍りける時霞

源俊頼朝臣

やしほ霞にかくれにしかすまた浦ゆく舟のみえぬ浦の遠

嘉元元年内裏十首歌合に野径霞

藤原信実朝臣

たなさきて野の霞ハ人をさそら志らね春の夕暮

従三位範宗

宿らむ末野の里の志るへさへ霞にまかふ夕煙かな

遠山霞といふことを

権中納言雅縁

春はむら野吹上乃浜風に霞もまたぬ紀路の遠山

新玉津嶋社歌合に浦霞

寳篋院贈左大臣

あらくせとの志ほ風吹にけり霞もそらぬおきつ白浪

前参議經忠

わか乃浦おきへの舟乃数かすか浪に隠して立霞かな

治承二年神主重保よみ侍ける賀茂社の歌合に霞と

二条院讃岐

春霞分ゆくまにに杉の葉の枯れ縁そ立かくれぬる

なかきさ湖の句を題にて百首歌よみ侍けるに遠峯帯晩霞といふ事を

頓阿法師

暮ぬるや夕への鐘にそれとしも山もと遠く霞ぬれ

宝治二年後嵯峨院に百首歌奉ける時春雪

山階入道前左大臣

ふるさとはまた北窓の雪消て都の空へ春めきにけり

野径残雪といふことを

権大納言俊光

ふりつゝく去年の白雪村消てわかなつむへき野への通路

正治三年影供哥合に山家残雪といふ
ことをよませ給ひける
後鳥羽院御製
掃よらぬ人もとひこぬ松の扉に残れる雪の
春のあれ中に
二品法親王覚助
春きても木陰つもれる雪の色に帰てみ山の松そ緑
延文二年百首の哥奉りける時
前大僧正賢俊
春のつゝ緑からゝ今は深さひくまそへつもりぬる春淡雪
後九条内大臣家にて哥合し侍りけるに
右近中将経家
宮滝の難の竹乃春風にこほりておつる庭の鶯
声しらす
従二位家隆
おほゐ川岩浪高しこえきぬる山の白雪とやまかひ
弘安元年百首哥奉りける時
式乾門院御匣
芳野川水とをゆく春風にかつ消そむる浪の初花
安嘉門院四条
鶯の家もふるさき苔の下に都人のまたぬ春の鶯
文治六年女御入内の屏風に人の家あり

て前の中にうへしひとき木にさしつかはす前

皇太后宮大夫俊成

花をそへたる枝よりうつる鶯はもさく宿のあるしなりけり

百首歌たてまつりし時鶯

左大臣

のとかなる日影とともに軒ちかき梢よりうつる鶯の声

崇徳院に百首歌たてまつりける時

大炊御門右大臣

いつしかと咲まと思ひし鶯や枝にこもりて花をさそはん

貞和二年百首歌たてまつりけるに

民部卿為明

春さそ色梅の立枝風ふきて花の香そへて鶯そなく

康花院入道前太政大臣家百首歌に

朝鶯といふことを

権大僧都尭尋

春はまた初風さむき芦のやに日影にほえて鶯そなく

題しらす

柿本人まろ

二葉よりひきそめてこそ人めみる人の老せぬ松をそめ

堀河院御時百首歌たてまつりけり

藤原顕仲朝臣

子日と

こし生れ二葉乃松をひきつれて千世ふりゆかむ世の要となん

後嵯峨院御時哥合に子日といふ心を

民部卿文範

かそふれは松よりさきに老にけり我をと思ふ人もあらなん

文治三年百首歌たてまつりける時

三條入道前太政大臣

ふりつみしわかなはそれとみて消えし野に出てや雪をまちし

若菜をよめる

梅宗仕雅綱

消まても残は雪の消やらて野へ乃若なも下もえにけん

建保四年後鳥羽院に百首歌奉りける時

従二位家隆

春くれは千代のはしめにふみ分て雪まの芹河にわかなつむらん

弘長元年後嵯峨院に百首歌奉りける

後九条前内大臣

誰か又山田乃原に雪分て神代の跡にわかなつむらん

延文二年百首歌奉りける時

中園入道前太政大臣

霞しく野へのみとりに白妙の袖を重てわかなつむ也

権中納言為重

雪も消氷もとけて河上乃こせの春野はわかなつむらし

若菜をよみ侍ける

成恩寺関白前太政大臣

おりとしも春のゝへにも雪とやまし沢にわかなつむらん

百首哥たてまつりし時

権中納言雅世

まつらちり野への緑にみえて来り春日数をつまぬわかなか

嘉元百首哥に

中納言為藤

小山田のなはしろ水をせきまくはまつおりたちてわかなをそ摘

正治二年百首哥たてまつりけるに

二品法親王守覚

みすしくひとくにおもの難波女もしらてやわかなつむらん

最勝四天王院の障子に武蔵野かきたる所

前中納言定家

むさしのゝゆかりの色もとひかねつみなからかすむ春の若草

貞和百首哥奉りける時

前大納言重資

梢にはまたふる緑をまたせて春の宮人の杜の下草

前中納言雅孝

ゆえいそ摘みかさなる草のまろうしわかな野への色に

正治二年哥合に若菜をよませ侍ける

後鳥羽院御製

春きても積し雪ハ消やらてむら〳〵みえし野への若草

百首歌めされけるついてに早蕨を

崇徳院御製

春の日に雪けの水ハなかれ行つまてくもゆる下蕨かれ

知らし心を

栄仁親王

出る乃時そともなきてさひしきもおりハ忘ぬ春の早蕨

梅花をよめる

二品法親王尊胤

消残る垣ねよりや咲よせり雪にまかへる梅の初花

文保三年百首歌奉けり時

後西園寺入道前太政大臣

まさきらり匂ふ花とみゆる哉梅咲宿ハ春のあは雪

貞和百首歌に

後福光園摂政前太政大臣

梅もそれとハみえぬ山里の霞そかゝる春の中垣

左大臣家にて三百首歌よみ侍りける時余風知梅といふ事を

前大僧正源済

吹つたふ風をたよりに問人もありとやこゝに匂ふ梅かな

梅花遠薫といふことをよめる

前参議雅有

遠さとゝ風にうつりてたよりもあらぬ袖まて匂ふ梅か香

文治六年女御入内屏風に人の家ある
軒へにむめの花咲たる所

前中納言定家

春ことの匂ひは風にしられけり枝のとあくる梅の下かせ

弘長百首歌たてまつりける時梅

従二位行家

春は匂ひはいとゞ袖にかけておりまよへる梅の下かも

落梅といふことを

楳若院入道前内大臣

待人のこゝろへもとめし遠き梅のみさそふ春の嵐かせ

百首御歌の中に

土御門院御製

梅かゝもあかぬ袂を契りしにあかれぬ雲の中にふかせ

梅盛開といふ心をよませ給ける

今上御製

冬とも春ともいはぬおもし咲みちて朝日にほへる梅の花風

玉梅の枝につけて瓊子内親王につかはしけり

瓊子内親王

にほひくる風のけてをとめねは匂ふとしるき宿の梅かえ

返し

瑀子内親王

とそよみていはれ深身をとゝめて侍補て梅か香ハ

寶治百首哥奉りける時梅薫風
といふことを　　　　太宰権帥為経

あかさとてまよふ鶯梅か枝に匂ふ空なき春風

百首哥中に　　　　式子内親王

なかむれは見ぬいにしへの春までも偲ふわか宿の梅かえ

貞和百首哥奉りける時
　　　　　　　　　　等持院贈左大臣

袖にまつ匂ひそうつる暮かさね軒端の梅の下かせ

思ひしらす　　　　源重之

風ふかはせめていはみも梅か枝をおりて袂に香をとゝめさん

　　　　　　　　　　侍従為敦

よしやさはたをりてをらん梅花立よる袖もうつる匂ひに

海邊梅といふ事を

　　　　　　　　　　式部卿邦省親王

あま人のしほくむ袖も匂ふなり難波の春の梅の下風

里梅を　　　　　　法印慶運

咲にけり難波の里の春風に今はかはらし梅か香そする

延文百首哥奉りける時

　　　　　　　　　　前大納言為定

思ふ事なかる枝まではあをやきりとしもなれ春雨のそら

春雨を　　一品法親王尭仁

春雨に新のいと水ならは目のまへに枝もみえぬ宿哉

家に五十首哥よみ侍ける時暁春雨

入道二品親王道助

花とこそ見ふやねまちかん春雨に雪とけやらぬ峯の白雲

弘長百首哥たてまつりける時柳

衣笠前内大臣

佐保山の峯の小家はあらはれて河そひ柳春めきにけり

おなし心を

後勧修寺前内大臣

春風のねかぬあたえもと白露はむすほゝれぬる春柳のいと

嚴安門院小宰相

ぬきとめぬ玉とそみえし春風の露吹みたす青柳のいと

入道二品親王道助家五十首哥に岸柳

源家長朝臣

高田川みなきれ岸のふる柳いくはるかけて春をしるらん

延文百首哥たてまつりける時春月を

民部卿為明

かすむ夜の光を花とにほはせて月の桂は春をしる哉

永和二年百首哥たてまつりける時

権大納言為遠

春なる夜のねきは志られけり霞すきたる秋は月哉

建保三年内裏百首歌めしけるついてによま
せ給ける
順徳院御製

玉島や川せの浪の音はして霞にうかふ春の月かけ

宝治百首歌たてまつりけるに
山階入道前左大臣

なかむれはこゝろ今まて春の夜の月よりさえて空たのめ哉

題しらす
進子内親王

難波かた芦の若葉に風こえて霞にしつむ浪の上の月

前中納言有忠

おほろなる光は月のならひにて霞にまさる春のよそら

嘉元百首歌たてまつりける時
権中納言公雄

我袖に老の涙のかゝるとも志らて世をも月やすむらん

二品法親王覚助家に五十首歌よみ侍り
法印長舜

いとゝ猶かすみてみゆる春の月くもりそへぬる老の涙に

文保百首歌たてまつりける時
後照念院前関白太政大臣

在明の月よりまちて郭公ハ人のなさけやなほしのはん

時鳥を　　前大納言為家

夏山の雲ゐの郭公のけしきみえすまてなく声も横雲

夜小松原よゐの人て十市の里の小峰の道

郭公と　　権中納言雅縁

ほとゝきす雲や霧の秋にも鳴ほとゝきすかゝる世の思ひも

嘉元百首中に　　後亀山院御製

春ハ又うすむらさきの声やれおさへの夜もりて

嘉元百首の中に　　二品法親王覚助

ほとゝきすなくを今こそ聞まて今ハとゝろきの嘉元鈔

弘安百首たてまつりける時

前大納言為氏

郭公をとはすゝゑ郭公きく山の名にしつけまし

貞和百首の中に　　後福光園摂政前太政大臣

夜半にまちみる空もたよりなし霧てもうすき郭公つき

文永二年白河殿にて人々題をさくりて

七百首歌よみ侍りけるに涼風郭公と

前大納言経任

ほとゝきす

行よふかき枕のうへに聞くそそら雲ゐの郭公のいつちゆきけん

嘉元百首中に　　二品法親王覚誉

あくかるゝ我よなかしへの春に花をもとめてたとらんと

百首哥たてまつりし時待花

前摂政左大臣

咲やらぬ花をまつらん山のはに人たのめなる春の白雲

花なし心と

今出川院近衛

はきそてちら待さいそてなかひはきたらよあ桜をも見む

易花と云事を

権大納言忠光

行末はもと限の山路ともしみぬ尾上のやへの白雲

左大臣に待を待し　新玉津嶋社三十首

歌よみ侍りしに　按察使公保

あやなくや雲にまかへん山さくらかすみわたせぬ山路しら

百首哥たてまつりし時初花

前大僧正義運

咲そむる一もとゆへに山のはの雲とかゝる花のうへみ

正治百首哥たてまつりける時

後京極摂政太政大臣

花の色をそれとそふし乙女子か袖ふる山の春のあけほの

貞治百首哥たてまつりけるに

祝部成茂

こしらちらぬ花ひとつせや風のとかなる春の初花

家にて人々花歌よみ侍りし時

左大臣

おもひやる心は小野のわか宿の花よ匂ふさ

よしの川代乃ま

新続古今和歌集巻第二

春歌下

百首歌めされし次に見花といふ事をよませ給うける

今上御製

雲と消霞もはれて足引の山桜の色そ匂ふらね

延文二年百首歌奉りける時

後深心院前関白左大臣

横雲は峯にわかれて咲花の色もほのかにあけほのゝ空

題しらす

清原深養父

咲は散り散れは咲山のさくら花霞さへすいそ見えくはほ

花歌の中に　源満元朝臣

咲ぬれは雲のよそなる桜かな世に桜しら山さくらかな

千五百番哥合のうた

正三位季能

花ならぬ咲ぬるよりかかさなりてそ白ふ雲の山かせ

貞和二年百首哥奉りけるに

後普光園前関白左大臣

遠き尾のさくら小嶺にきりまかひてそれともとはまし

寛治二年百首哥奉りける時初花

皇太后宮大夫俊成女

春も今はもの桜の咲そとや雲より白ふる山さくら

嘉元四年内裏にて人々題をさくりて

哥よませ侍ける時花始開といふ事を

儀同三司　実

咲そめて侍はまた白雲のまかふは花そふ山桜かな

山花といふ事を

清原経賢

明日はまたつれてまたきれな山のもとを雲よりそみむ

といふ事を

入道一品親王尊助

高砂の尾上の花の咲そめてきえぬ松の雪とみえけれ

弘長元年百首哥奉りける時花

衣笠前内大臣
みよしのゝ山の松風ふきしほりあくるまてさく花桜かな
建保三年内合に春山朝といふ事を
前中納言定家
こゝろあるあさけの山の松風は霞をわけて花の香そする
題しらす　従三位頼政
あさちやまよそに雨そ弱るとも雲風の花そかす
至徳三年三月仙洞にて人々題をさくりて三十首の歌よませられけるに見花といふことをよませ給ける　後円融院御製
桜さく木末を峯の雲とのみよそにみしよのみよしのゝ空
住吉社によみてたてまつりける三十首の歌に山花と
儀同三司　資
芳野山峯の白雲なからもみえてしもあかぬ花の色かな
新玉津嶋社三十首歌に
写過入道前太政大臣
見よ雲はいつても花の陰なれはかすみにそふる色をもみる
前大僧正果守
暮てよりおもひもあれと思ひてそ行花の下臥
朝花といふ事を　中務卿宗尊親王

みよし野はちるよりほかの春ぞなきあらしおきみよしのの山

花歌の中に　平宗宣朝臣

ふるさとの花の春ごとに春風よよそなる雲を残せて

百首歌よませ給ひける中に

後小松院御製

花は峯よりふもとに咲初て雲におくるゝ花ぞまさる

建仁元年後鳥羽院に五十首歌奉りける時

旅て花を　家隆卿

つてそつる宿はかりそに旅ぞ花にとまりつる志賀の山里

千五百番歌合に　惟明親王

みな人の花と見て出ぬるまは春ぬ宿りの鶯のこゑ

法金剛院のちれりしに人々日くらしあそひて歌読けるに　二品法親王守覚

ちるを見よ木陰に残されてなましあるまじきの花すまひと

花の歌の中に　西行法師

おほかたの春はなのもよほしいつまてかくらくれそめまし

月前花といふことを　頓阿法師

白雲の風かゝる高ねの桜咲しよりくすゝもやらぬ月のかけかな

千五百番歌合に　後久我太政大臣

おくやまハ桜の庵にあらむ人こそ花より出る峯の月かけ

延文百首哥奉りし花

一品法親王法守

桜かりくらす山路ハ暮はてゝかへるさや花と月とにみかへらん

五十首哥よませ給ひける中に

後鳥羽院御製

都人そこともいはす折もまてとふ宿の志賀の山こえ

大原野のさくらをみんとて人々よひつかハしけり

藤原實方朝臣

こゝすなる大原山の桜花ちりなハおりて志らせむ

弘安元年百首哥奉りけるに花

藤原信實朝臣

家ちかくいはそねぬ桜をねよるかにとも花の宿りハ

康安二年春の比木情によせよみ侍て哥合しけるにおなし心を

二品法親王覚誉

ゆくさきも思ひそて山桜としへしハ宿の影そみる

住吉社によみてたてまつりける哥中に

久世入道前太政大臣

むかしより梢にかゝる白雲のならふるやみんよしのゝ山

春哥中に　前大僧正道意 寺

ちりつくもよをまとし老の世をさそはれやはする

後九条前内大臣家歌合に

前参議忠定

色も香も桜も月はむかしにてなをやおもはん昔なからに

貞和百首歌に　中園入道前太政大臣

をちこちに遠さかりゆく春やみよしのの花の外

前中納言為秀

人はみなとてもくらん風にこそ志ら遠しとおもふ宿の桜を

徽安門院小宰相

世をいとふ身にてもさそな花の盛見んよしのの奥

遊花と　源義将朝臣

春は猶さくらちる花の中にたつ春の遊も浪やなき

建保四年内裏歌合に

常盤井入道前太政大臣

山桜さかりの比は露わけてこころとまりて向ふ花の下かけ

建仁元年二月後鳥羽院に五十首歌奉りける時

参議雅経

色は雲匂ひは風にまかせてもかつのまたとを見さきの桜

弘安元年亀山院に百首歌奉りける時

前大納言為世

打しらぬ風のたよりもさそはねはおのれとや花のちるらん

同三年春歌めしけるに人々よみて
たてまつりける時依花厭風といふことを

前参議雅有

をしと思ふをいとふにはあらねとも心そうつる花の風

千五百番歌合に　寂蓮法師

春の夜のつゝむ花の梢とみるはかりいつくの雲の春の山かせ

百首歌めされける時落花

左衛門督實雅

山のはに夕ゐる雲の色見えて吹こす風に花やちるらん

河上落花といふことを

権中納言雅縁

吉野のゝいはをふきおろし河せにかゝりてとまる花筏

千五百番歌合に　参議雅経

嵐の吹わたるに高瀬川せきとめぬ花も瀬々の白浪

永和二年百首歌めされける時惜花

後八条入道前内大臣

おりてみんとはおもはすとなにはちるかこのもとみむ

深守法親王

しくふそよおりていくらにかとわくらか花の色にこゝろ

題しらす　中納言家持

鶯のなきちらすらん春の花いつしか君とたをりかさゝん

千五百番哥合に　従二位家隆

なへてよの花とは思はし鶯のなくふるすなる谷のしら雲

左大臣によませ侍し　新玉津嶋社哥合

に夕落花を　権大僧都尭孝

色はいまた残ると見ゆる梢にもさかりはすきぬ春風そ吹

延喜御時哥たてまつりける哥の中に

紀貫之

打みふくさつろひおく桜花ちれはかつちる花の雪の花

崇徳院に百首哥たてまつりける時

皇太后宮大夫俊成

散花のおしさをとめてせめやらんへさまよへるれ山かせ

題しらす　藤原敦雅朝臣

あるふちの桜と風のやとりにはおりて惜ぬ春りそなき

住吉社によみてたてまつりける哥に落

花　源経氏

ふきせとをくれぬ花は今ひとゝちりぬひとりむとたのまん

春乃哥の中に　法印浄弁

八十まて秋月世にふる振さへ涙りふゝるか萩の白露

新玉津嶋社三十首の内に

前中納言実遠

いくとせか月に志ける夜振てもひかりありしむかし思ふ露

慈寛上人

秋志のゝ庭の海緑吹かて風は猶ある萩の下つ露

花下送日といふ事を

正三位義重

秋そとよゝなきにし雲の下ゆくは今はたにしくもの白雲

散しらす

入道一品親王尊道

花はたゝ山の夜風ふけゆくゝたりそ雪になりゆく

文永二年白河殿にて人々題をさくりて

百首の歌よみ侍りけるに野花と

云事をよませ給ける

後深草院御製

雪とのみ見るかひそなき桜花なと木のもとにとゝまらさらん

曲水の宴の心を

権中納言家賢

めくりあふ春のやよひのみかはの名にはなかれそ萩の盃

文治六年女御入内屏風に河のかたりに

春駒ある所

皇太后宮大夫俊成

春駒乃聲澤になるゝきゝすそ芦の若葉に猶そたつらん

家百首歌合に雲雀とよみ侍ける

後京極摂政前太政大臣

うす曇の霞もふかき木かくれに朝日待まの雲雀なくなり

たかし心と

前大納言為家

霞つゝ空こそわかめ草原におちてもみえぬ夕雲雀哉

権中納言雅縁

行そ暮ぬ友そしとてや夕雲雀野沢の水にむれやすらん

よふこ鳥とよませ給ひける

土御門院御製

巻向乃檜原山のよふこ鳥すむ小里人そよふなる

順徳院御製

なきやみけむふ乃杜のよふこ鳥ゆふかけしらん春かれまし

正治百首歌に小雉子と

後京極摂政太政大臣

かり衣はそのゝ雉子うらむらめ妻をこひける萩の焼原

崇徳院に百首歌奉りける時すみれ

と

皇太后宮大夫俊成

紫乃ねはふよこのゝつほすみれ真袖につまむ色もむつまし

建仁元年新宮歌合に水邊躑躅

前中納言定家

新田川いそのゆふしも影みえて粉水くむ妹の衣ぬるゝ

文保三年百首奉りける時

前権僧正雲雅

春もやまつむ花のおもかけさそて立岩清水しけ

里款冬を

後二条院御製

色ふかみいまそ見る里は山吹の花咲よりやなつも初なん

百首歌奉りし時款冬

藤原雅永朝臣

いまそ思ふ色ふかいりせ山中なる川の山ふきのまれ

おなしこゝろを

二品法親王尊胤

思ふともいはぬ色なる山吹やくちなしそめにけに咲らん

貞和百首歌に

入道贈一品親王尊円

玉川の浪にうつろふ山吹を秋まてもゆるせ井手の里人

等持院贈左大臣

折しもこそいはぬ色とて款冬もちらの里に春そ暮ゆく

住吉社にたてまつりける歌の中に

大納言重光

咲にほふ松はおのれうつりまて色まかふたるきし藤波

よそにしもみきはふかす花の咲かゝりけるとおり

よつかすとて　中務卿宗尊親王

紫の雲とそつら藤なみをたてゝなひく春のこゝろよ

延喜御時藤つほにて藤花の宴せられ
侍りけるに仕うまつりける

三條右大臣

君か世ハ雲ゐにたかく藤のむらさきに立まとはれんとそ

貞和百首哥に　後福光園攝政前太政大臣

ときやまの紫に咲そめて三代にこえたる小の藤

百首哥たてまつりし時

左大臣

十かへり花のゆかりや紫乃庭にかさぬる松の藤なみ

藤花随風といふことを

津守國冬

吹くれに松の藤浪なひくなり春をハ風にまかせはなん

百首哥の中に池藤

伏見院御製

春ふかき庭すそらの紫の藤咲かゝる池乃ほとりなと

文永二年白河殿にて人々題をさくりて
七百首哥よみ侍りけるに小浦藤を
よませ給ひける

後嵯峨院御製

ふかみとりやちよへん春ことに梅咲かぬ松ならしたま
梅のこれとよませ給ひけり

土御門院小宰相

こち吹里子の梅法にみゆくそゆくてにさそふ袖やかさね
おもしろきを

式乾門院御匣

ゆく春の三なみ見よ給の花の梅の梅法しやかくらん
後小松院よそ人にみせとさそりて五十首
ゐ給ひてまゐりけるに暮春を

権中納言雅縁

花の梅ねよりの衣春くれて袖のなこりは梅香そ

題しらす

前大僧正禅守

これもまた我やしゆきむ住吉の松よりまた岸の梅法

文保百首歌に

後照念院関白太政大臣

大かたの春の別のなこりさへたゝこのいもの春おもひけり

暮春風といふことを

従二位雅家

花ちるとなに惜しむらん吹風のゆくへ春もしらぬかな

弘安百首歌に

前大納言為氏

こそみむとおもひしふるきかすみ雲の春の暮かな

千五百番歌合に

後京極摂政前太政大臣

よしの山花は春風吹たてゝ雲ある峯に在明の月

承久元年七月歌合に暮春曙といふことをよませ給ひける

順徳院御製

もゝしきやはな宮のふるみちに行末まかせぬ春そゝふ

前大納言為家

おほかたの春の名残もこゝにとまれし宵の間の晴そ春の名そ

貞和百首哥たてまつりける時

中宮大夫公宗母

今はとて帰る春をも白浪の立かへる春風ものこる山

建保名所百首に

正三位知家

今はゝや春なかめても末の松をこりまの山風の月

百首哥たてまつりし時暮春

権中納言雅世

やよひ山春の名残もかすみの色やなかにそゝおりて有明の月

後三条入道前太政大臣

暮ぬる春はいつくにかへる山ちとしらさりけりて帰らん

建仁元年影供哥合に山家暮春といふことをよませ給ひける

後鳥羽院御製

暮ぬとも霞ハのこれ集めかの志はしも春のかたみに

嘉元百首哥たてまつらせ給ひける時

万秋門院

おしむへき春もかひやなくてちりかへる花の霞れ袖の別に

永和百首哥よ三月尽

前中納言實遠

ゆく春のあとハなつさの河浪よ春せきとめよ山陰りなし

新續古今和歌集巻第三

夏哥

更衣の心をよませ給ひける

後小松院御製

よしのハおもふらむ色をかはらすも今日そかへぬる深の袖

百首哥めされし次よ夏の心を

今上御製

今日よりハ袂もうすく立かへて今日の名となき夏衣

首夏風といふ事を

成恩寺関白前太政大臣

吹風を拂やとゝむ花の香にすゝき袂にゐてまつらん

題しらす　前中納言宗重

夜もすから風の袖を拂ひつゝ遠近に花の香そする

中納言為家卿よ五首哥よみ侍りし時

餘花といふことを　頓阿法師

行さぬやと今こそとゝめ山櫻春ハつきぬる花の梢を

家にて題をさくりて三十首哥よみ

侍りけるに山新樹といふことを

右大臣

それとたに志られし世ゝ志る山櫻花もちらて夏の梢あらねとも

夏哥中に　法印經賢

志らくもとゝめし山嫩乃木のえの枯れぬ緑よ

住吉社よまゐらせ侍りける哥中に卯花と

後香園院入道前太政大臣

つきそふる雪とそみる山櫻ちりぬまゝにさける卯花

文保三年百首哥乃中に

芬陀利花院前関白内大臣

鈴りを音の雲は卯花も拂あり明の月かとそみる

文治六年女御入内屏風に賀茂下社

神館のかりにおいひしゆるまゝ入河の木

前中納言定家

ちやぬるかりのこゑをさそひていつの世のなかよおもひなくらん

千五百番歌合に　惟明親王

あしひきの山郭公まつとや春をこゝろにめしぬらん

聞しらす　中務卿宗尊親王

まてともいまたなかぬ郭公まつにつれなきこゑさへみえぬ山のは

住吉のまつにまちてまつりけるか夜の中に

源頼元朝臣

郭公まつよひもすきてなくこゑは雲のはるかに一聲そきく

千五百番歌合に

後久我太政大臣

子規まつよはすきてさとのゆふくれをたのむまにゆかぬとさひしきちきり

杜郭公といふ事を人々よませ給ひけるに

後二条院御製

時鳥猶はつねをまちてなくこゑをといはゝや杜の梢ならまし

弘安元年百首歌

大藏卿隆博

つまこゑさそふ山のはをものしたにまたれぬる郭公かな

後京極院大納言典侍

おさかてふ秋つかひを過て山時鳥なきこそわたらん

安嘉門院四条

たか里にいつへ行てそ時鳥我につれなきねをは鳴らん

前大納言為世

今は又忍ふ音過よ子規あかぬなこりを待ぬ日を過

前大納言為兼

時鳥さてしもなかれ初ねとて家路にまたぬる夕暮

嘉元百首歌奉りける時郭公

法印定為

暁の山のは出る郭公ゆくへもしらぬ一声もかな

花山かく雲月一日暁に時鳥の鳴を聞て

藤原長能

なきやまけ山時鳥春まてて過さんかゝる人のこゝろに

最勝四天王院障子に三輪山かきたる所

前中納言定家

声ふこすは三輪のひはらに時鳥ゆふてたれ声をと誰か杉村

前大納言経房家歌合に初時鳥

寂蓮法師

あくかれ人の心を郭公里なれそむる初ねの一声

文保百首歌に

後照念院関白太政大臣

ほのみえぬ浪路を過り時鳥声をとおもふのよそは下露

正治二年石清水若宮歌合に郭公

法印季清

さつきやと思ひしよりも待わびぬ年は卯月とたのみけるより

百首歌奉りし時郭公

三品親王

ほとゝきす卯月も過し待るその杉山にゆふ暮て

たゝ一心と

法眼慶融

時鳥さ月待まれねとそへて我宿のはなたちはなそさく

入道二品親王性助

子規たゝ一声をきゝのみかくし雲井の月に待まされつゝ

夏歌の中に　寶篋院贈左大臣

ほのかにやと思ひかけとも郭公こゝにつきてそ初音まれなる

郭公よそにきゝけり一声の又なかとおもふ雲のまきれ

家に五十首歌よみ侍る時

式部卿邦省親王

こよひは猶ねぬ夜に一声の後をもまつる郭公かな

麻花院入道前太政大臣家百首歌に

権大僧都尭尋

まちねぬ秋の為かはさらぬたにねたはすまたるゝ時鳥

貞和二年百首歌奉りける時

後三条前内大臣

時鳥おそくもまちいつかならむ人ハ思ひなくらん

文保三年百首歌奉り

津守国冬

郭公思ふ心のこれ限りてなくやさ月の森の杜

前権僧正雲雅

鳴そめて声にきゝぬる山の井のあかでもあかぬ時

百首歌めしゝ次に深夜時鳥といふこと
をよませ給ひける

今上御製

月もはや山の端ちかし時鳥又なく空に思ふ夜半かな

左衛門督實雅

なへてまつ人のこゝろや時鳥あくる雲まの月に鳴らん

夏歌の中に

静仁法親王

郭公きつゝに鳴てふるにありつきぬれは花橘の空

後小松院にて人々題をさくりて五十首
歌つかうまつりけるに郭公遠

権中納言雅縁

なほあかぬ山郭公一声のあかつきかたも晴ぬ雲井に

題しらす

皇太后宮大夫俊成

まつほとも今は忘れと時鳥なきつるかたの空にもあかぬ

五月郭公といふ事を
式部卿邦省親王家少将
ふかきねをとひてもなけ時鳥あやめをむすふ枕に
嘉元百首歌に　二品法親王覚助
めくりあふほとはさ月の郭公かねてもなほそまたるゝ
さ月はかりに嚴子女御のはりしにおなしと
ありけり　天暦御製
いそくらんふしんを郭公我ふく鳴てきかせやはせぬ
正治二年石清水若宮歌合に
よみ人しらす
時鳥ことにとまらん宿の梢を鳴てやとらん
貞永元年七月歌合に撰郭公
後鳥羽院下野
待ていつく山路の時鳥声のみ雲になかるなり
藻壁門院少将
花の色はみえすなりにし時鳥さやの中山あふ坂
源家俊朝臣
猿のこゑの露しけきをわけ山時鳥なさけくちらん
正治二年百首歌たてまつりけるに
三条入道左大臣

くさ庵の軒にかゝるあやめふくかけの風

文治六年女御入内屏風に菖蒲ふける
所に人々家にかへるところあり

前中納言定家

あやめ草なかき契とむすふらん千代のさ月といはふやとには

夏哥中に

後京極摂政前太政大臣

夕立の名残の雲を吹風に鳥羽田のさなへ末さわくなり

右大臣家三首哥に早苗を

前大僧正滿海

時きぬと山田のたみのあさ衣さてぬ日もなくとる早苗哉

夏草を

前中納言為秀

夜さそいは梢はかりの緑にておもしとさこみの軒の下草

建保三年内裏哥合に野外夏草

参議雅経

夏草はみかりもとほし岩代の野への下露ふかくかりには

従三位範宗

いにしへの野への夏草しけれつゝ標の枕露むすふまて
むかしゝのふとよみせけり

後小松院御製

みゆきせし千代の古道絶はてゝあれていくへにしける夏草

千五百番哥合のうち

隆信朝臣

旅人のならひにねする都をも宿野の草に枕まさせし

夏哥の中に

中務卿宗尊親王

打むれて螢飛かふ沢の夜は草にも夕浪まそて浦風ぞふく

凡河内躬恒

志けきみの日よりにほへる宿なれはそのかみならぬ四季の色

延文百首哥の中に盧橘

民部卿為明

うつりにしこゝろをかけて匂ふや夏の袖の移れ乃梅

夜梅といふことを

雅永朝臣

時しあれは忘れぬ宿の春の夜の昔を今と匂ふ梅

百首哥めしてまつりし時

権中納言雅世

よの葉の花梅は志のふそよ代々の昔風のにほひを

文安四年内裏にて人々題をさくりて哥

仕うまつりける時梅薫袖といふ事を

権大納言為遠

立よりてをらぬしもやうつさまし袖にまさりし移れ梅

百首哥の中に五月雨

順徳院御製

五月雨はまやの軒はも朽ぬへしいとゝ深田の杜のしめ縄

正治二年百首哥たてまつりける時

参議雅経

五月雨はかりその河をもみこえて浪よそさへ井手のうき草

新玉津嶋社三千首哥に

後八条入道前内大臣

浪こゆるみつの入江の五月雨にあひくみ草やうきて落

頓阿法師

五月雨に河まさりて廣せ川おふよもたてまつる白浪

進子内親王家春日

おちやまぬ軒の雫に五月雨のふるともしるし池もさひしき

前中納言定家

見なれぬるくさなる雲はたえもせて思ひきせぬ五月雨の比

延文百首哥に

中園入道前太政大臣

晴ぬへきそらともみえぬ五月雨はよをかさねたる雲かさなりまさりけり

寛喜四年日吉社撰哥合に

前大納言為家

夕暮やうねの雲の底へ山の端もちてゆくもみえぬ五月雨の空

夏哥の中に

中臣祐殖

ほしえぬ色もこそみゆ五月雨にくりてさらす布引の瀧

百首哥奉りし時　右大臣

山川のみなきはさりて久方の空にもふるさ五月雨の雲

左近中将定親

五月雨は淀の川岸水越てあらぬまこもに舟よばふ也

左大臣よりすゝめ侍ける新玉津嶋社法楽哥に

前右大臣

うき宿の袖かわくらし五月雨は晴ぬ日数や宇治の橋姫

同社にたてまつる百首哥の中に

権中納言雅縁

雲のゐるくらき山の五月雨は木の葉もまさる峰の遠方

猿五月雨といふ事を

藤原雅朋

ゆき人の袂もいかにやつるらむ京は五月雨の空

正治百首哥に　従二位家隆

とりすてる山の岑なり衣ほすとも忍ぶの袖の露かな

深夜鵜川といふことを

後光厳院御製

くらきよは山かけくらき大井川月になれてや鵜舟ゆくらむ

夏哥の中に　一品法親王尭仁

今宵はやさゝ月もや志川のなかるゝにん数まさりけり

従二位家隆

やり火のつまさる河の下りえを心よくてもゆく螢かな

貞和百首哥に　前大納言公泰

山陰のしきてくもりみだれてなかるゝ川にとふ螢かな

螢をよめる　源光正

思ひきえ心ましもて燃つきぬ中なる涙にとふ螢かな

弘長元年百首哥に

後九条内大臣

しふ螢いかりの水にやとる影ぞひやゝかにまよひけん

住吉社によみてまつりける中に

水辺螢を　在原雅親

池水のいひ出てこそこひとや月をのこれる螢なるらん

太政大臣よませ侍し新玉津嶋社三十首

哥に　江螢　前摂政左大臣

螢とふ堀江の浪にゆるこしにきえてふ玉の数やそふらん

権中納言雅世卿にて人〳〵三首哥よみ

侍けるに螢を　源持之朝臣

秋ちかき籬の草は露まても数みえてとふ螢かな

夕鶴を

前参議教長

秋ちあしたくゝみ露やみかんさてねとめる天の岩戸を

延文元年六月内裏にて三首歌講せられ
けるに禁庭夏月といふことをよませ給
ひける

後光厳院御製

くもりなき光をそへて玉しける砌にすめる夏のよの月

後山階前内大臣

出るより入ぬる影とみえにけり山のは近き夏のよの月

権中納言為重

明わたる涼しさもたぬ萩の葉の露にやとらぬ夏のよの月

後小松院にて人々題をさくりて五十首歌

たてまつりし時朔夏月といふことを

権大僧都堯孝

月もまたのこる柳の糸清め夜は入露をそへて梅もそみる

鹿苑院入道前太政大臣家百首歌に

夏月

権大僧都堯尋

やとりける月は移りて絶間の雲ゐてもめくる宿哉

延文百首歌中におなし心を

入道一品親王尊道

こよひの月宿とこれは宿の露にあかる光や月にそふらん

夏歌の中に

後小松院御製

こゝしおもひ行ゝさ枝の雉我よ葉かく月をみる顔そあさき

建保五年百首哥に

皇太后宮大夫俊成女

夜刈のかゝれ行く原かりそてみゝさ我身のやとり哉

郭公稀といふ事を

養徳院贈左大臣

子規なくのさ月をまねとやとゝふ我まちのびけり

崇徳院御時六月朔夕恋郭公といふことを

よませ給ひける時

皇太后宮大夫俊成

鳥こむかしをもおもへは子規ゆく恋をしるみな月の空

瞿麦を

中納言家持

我宿の庭にこれも咲かゝりたかりてひとめみるへき絶

法小松院そて人こ見とさりて云つゝ

まゐりけるに

前右衛門督為盛

咲てそ志川か垣ねの枝まゝね我をおもひ夕色のむ

蓮をよめる

右大弁正隆源

夜の月もてるて池の蓮葉よ夕露こゆる風そすゝしき

百首哥よみてまゐりし時夕立

左大臣

夕立の雲は我よりさらてもみに涼しき風のおとかな

延文百首哥よみ侍しかと

民部卿為明

ほしくあへの市人はゝしさゝえゆく夕立の雲

貞和百首哥たてまつりける時

等持院贈左大臣

山里はふしぬもすし風たてゝまちふもとの夕気色

延元百首哥よ

法印定為

まれぬる雲はへはしめの蝶のさきを山の夕立の空

かり室をとよませけり

土御門院御製

くもとおくとよむこゑもなきさのかみ宮こそうるあはれのかた

かなし心と

順徳院御製

限あれは富士のみ山の消の日もたえぬかみ山の下

延文元年六月内裏にて三首哥講せられ

けるに夏色納涼といふことを

後福光園摂政前太政大臣

名にしおはゝみきりに絶ぬ見るからにこそ涼しき秋

見る月の法風をこよしく吹てむすひあそひ

そこさむき荻の声かくみえぬましく

くく

後深草院弁内侍

ましはぬ萩の下葉に露おきて涼しくなれぬ村雨の空

野径納涼といふ事を

前参議雅有

日影をそみちくさとむる小坂のやまもとに涼しき露風のをさ

元亨元年九月亀山殿にて人々題をさ
ぐりて五十首歌つかうまつりけるに納
涼のこゝろをよませ給うける

後宇多院御製

志のふ心もとめは山のおくに我身をとしもなきぞのゆふ暮

新玉津嶋社三十首歌よませられしを

西園寺前内大臣女

涼しさは夜のかぜにぞみなせ山のいはねの松にのこりける

月前遊涼といふことを

俊秋朝臣

志かの山峯にかゝれる月の影さゆるまで秋は空なり

千五百番歌合に　二条院讃岐

夜のまに月の桂の下紅葉いくよの秋のひかりそへまし

住吉社によみてまつりける歌中に

[illegible]辺入道前太臣

袖かさね月そさやけきさ夜と共におもひのまゝに露とみえつゝ

夏衣とふくと　勝定院贈太政大臣

稀なる秋の夜はをも嫌ふやうなん曉かきの神の上の家

儀同三司並さため給へる小聖社亦哥

よみ侍る納涼　後宏院贈内大臣

めぐみある蝉やよひて夕暮の松に涼しさ新乃風

故小松院にて人々題をさくりて五十首

哥詠みけるに杜納涼と

権中納言雅縁

よそまては思ふ乃杜は木々にかよふ秋の風乃涼しさ（き）

新玉津嶋社三十首哥に

法印定巡

蝉のこゑ夏にしらぬ川風よりこゑを山陰にて

建保五年百首哥よてさふらひし時

従二位花宗

空蝉乃殻は露や結ふらん結田の杜の木枝乃志て葉

千五百番哥合乃うち

大納言通具

さきとては根をそむく風もなき峯より西の日影の忽

文治六年女御入内の屏風に河乃ほとりに

六月祓するところ　皇太后宮大夫俊成

君かためけふのみそきに泉川万代まてと祈つるかな

前中納言定家

見そきして清き河浪千とせまて世にもたえせぬか流そ

夏祓といふ事を　前大僧正果守

里人はこよひゆふてふ三輪川のきよき流にみそきすらしも

千五百番歌合に　土御門内大臣

みな月のきふまて行のよおりにそ君か千世をいのる

貞和百首歌めされけるに

光厳院御製

夜祓川ふけゆく浪の涼しさはあすの秋とやまつ立らし

建保四年内裏歌合に

前大納言経道

夏のみそきしてゆふ浪の立田川嵐そみのかよふ秋の瀬

新續古今和歌集巻第四

秋哥上

七月一日のあしたよみ侍ける

鎌倉右大臣

昨日こそ夏ハ過しか朝戸出の衣手寒し秋の初風

千五百番哥合に

前中納言定家

秋萱の思はぬ方に吹そめし衣手うすき秋の初風

貞和百首哥に

入道二品親王尊円

秋きぬと夕つけ鳥の音ならてよそにも稲葉門田風そ下せ

初秋のこゝろをよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

草も木も色かはる峰の初風ハ吹そむるより月そ澄ける

百首哥奉りし時初秋の心を

二品法親王承道

吹からに月ふくむ風の音羽山関路越てや秋もきぬらん

浦早秋といふことを

侍従伊成

月かけと吹まかへしか玉もかはあさかの浦の秋の初風

秋哥の中に

養徳院贈左大臣

それなからしくれさひの雲まよふ夕の空の薄の河風

建長三年影供歌合に初秋露といふ
ことを　前大納言為家

玉ぬける露のそてかと思ふより我の初秋はきにけり

延文百首歌に早秋を

一品法親王法守

なれなれにきけはさひしき物そとも思ひもしらぬ秋の初風

後九条前内大臣家歌合に

昌庵入道前参議民部卿て

行とやは月にもたえけ秋の立きしかりけ萩の上風

新玉津嶋社三十首歌に

是心院入道前関白太政大臣

この夕風より秋の音信を萩の上にしらするそはしめなりける

源貞世

荻におとせし荻の葉の上に風の音にもとろく露の命

おくしらす

権中納言花輔

昌の一むら薄おかみにそまつとられは秋はきにけり

後鳥羽院御時秋撰歌合に

後久我太政大臣

吹風に下葉のもろき柳のかつこそ山に秋はきにけり

久安百首哥に　花園左大臣家小大進

風の音に秋をしれとや荻のはのそよくは秋の哀を催すいなほ

百首哥奉りし時荻

左大臣

荻まふてかをさとすへ松世をゆひしのこや思ふめま

おなしくを　入道一品親王永助

妹さえそ風のやとりかくてめもあかとやそよく庭荻

嘉元百首哥に　前大僧正良覚

波はくらふそよきて露こさは荻ふく風の秋のもゝ

永和百首哥奉りける時

後己心院前関白左大臣

うへて心つくしに秋風を寄らるゝ庭の荻のは

夜半荻とふらむを

後京極摂政前太政大臣

秋風におとろかされてすたれまく誰か住なしし宿の離

荻のを

前大僧正道意

夜その秋をしれは荻を吹かせに身よの露そ袖にみちて

後小松院に人々十五首哥奉りける

時　儀同三司 基

月影を待す小夜ふけて荻の葉に秋ふかき風の音そのこる

貞和百首歌に　民部卿為明

荻はらや風のやどりはぬまもなく枕にちかく渡る荻原

住吉社によみてたてまつりける歌の中に　源詮信

秋風に荻の葉そよく枕よりとなりきほかくて枝の葉

妹背の中に　法印浄弁

今よりのかさね秋萩をいかにせんゆふ付鳥の萩の上風

給七夕とふるすと　洞院摂政前左大臣

あまの原空なる川のゆくへもしらず秋にはおへとみ舟せかん

後九条前内大臣家歌合に

土御門院小宰相

天川ひとよをみて彦星のつままつ舟やくるさき

弘安元年百首歌たてまつりける時　安嘉門院四条

あまの川やそせのなみもみちかり雲かくしてぞ星合の空

二品法親王守覚家五十首歌に　源師光

七夕にまつよの糸引かけてくるとまちみる星合の空

能しらず　俊頼朝臣

昔よりいかに契て七夕乃人やりならぬわかれなりけん

建武元年七月七日内裏にて七夕の哥講せ
られけるに　前大納言為定

七夕の糸あひよりなひくたつねもと秋かりやまれ結ひ女ん

藤原雅朝朝臣

織女乃天のは衣露落て糸あはいの袖に秋風そふく

崇徳院御時哥たてまつりける中に

皇太后宮大夫俊成

七夕はけふしもことふらんこよひは雲のよそをへさて

正治二年百首歌奉り

前大僧正慈鎮

七夕のしるしやこよひたえぬらん雲こそかけね星合のそら

貞和二年七月七日花園院にて人々三首哥
よませられける時七夕雲を

後八条入道前内大臣

星合のそらや秋かせいかならん雲のよそにてそね契るらし

七夕を

中納言兼輔

七夕をとりにてはいま天河浪もたゝまて風をまつらん

天禄四年七月七日人の许へつかはすとて一条

のらんこれまけわさし待けるとし乃

おなしく　　恒徳公

あまつ風ふけとも雲の通ひ路に七夕の年の緒練て
くてはあそひなりけるにけとりて

中納言保光

年ことに秋の中にも七夕は秋ひとにしんあつしし

延文百首哥奉りける時

等持院贈左大臣

七夕の渡る露にも天の川うけ葉や袖なるらん

正治二年百首哥に

従二位家隆

行分し衣にかゝる天川ふかくなかし衣の袖こそ見

七夕後朝といふ事を

源重之

袂そとひやるとも七夕の明しそれあまのそこなも

おなし心を　　平師氏

立かへりとへは去きわたりかゝ明ぬその所は河なと

八日あした選子内親王よりつかはしたるの
露をとれるにつけて露なきてあらなむ
我ことゝひやまことなりけるとしに

法成寺入道前摂政太政大臣

天川ゆふかけの露けさにいゆくとも哀しなきを
思ひしらす　相模

我宿の萩か下葉のしきにいて秋はまたも生ふけるか
萩の露をはらんしてよませ給ひける

花山院御製

妹くまハ梢ふくしもなきよりも萩の下葉そ露けかりける

延文二年百首歌めされける次に

後光厳院御製

秋とてくふる風にさそふ萩の下の花も昔ならやうつるね

野亭夕萩といふ心を

従三位雅家

あたちの野へのま萩を分て夕露なから結ふ庵

旅宿萩露を

明魏法師

里ハあれてとこそれ袖の色に見る妹の野辺なる萩か露家

新玉津嶋社三十首歌に草花

従二位家平

夕露もまたいやましの秋萩ハ雨のうへそぬれ錦なりけり

あらしんを

権中納言雅縁

ま萩原下葉はいとゝくるとも野に日をとつるや錦なるらん

前参議経盛家歌合に

刑部卿頼輔

秋の野ハむら〳〵おほれし萩の錦よ志かやそふき

従三位頼政

萩そよくむらさわめ野のはんをとはへものうつろふ

行路秋花といふ事を

修理大夫顕季

旅ゆけは花野の小萩咲にけり行人の袖句ひまて

寿永百首哥に

前中納言雅孝

ゆふくれの野原の旅ねよりも露にしほれてみたれ萩妹

建長三年影供哥合に朝草花と

衣笠前内大臣

そのかミ長月朝の時雨てハ露けさまよふ妹萩ぞ

新玉津嶋三十首哥に

頓阿法師

白露の結ほそて秋萩の色ふかさより思ふかなり

権大納言實名

まつりこうかくれ野の女郎花とひゆるまてや人やみえん

祝部成光

咲花の色にやうつらん千種より野への夕露

たゝ花家ふく草花露添といふ事を

権中納言雅世

なれあまた聲への千種に露のまに咲てもさかの野やかくるらん

建長三年影供哥合に朝草花と

前大納言為氏

錦かゝる白露もうつろひぬ咲そふ嵯峨乃花の千種に

題しらす　按察使公任

秋の野の花乃露とも志らさりつ千草の末にやとる月影

柿本人丸

まとゐは袖さへ今はむすほれて末ましら露にたくへつるかな

中納言家持

秋風は来とにふきそふ野のへの萩のちるをしらねはも

建保名所百首哥より

従二位家隆

をくぬの聲への秋萩ならそれ色なる露よ嵐ふくなり

題しらす　二條院参河内侍

蟲の聲秋萩分る袖やこゝまて色は八月のしみたるのこゑ

源信明朝臣

こゝろあの人乃見さしの景は花の露ゆきそそうす里無暑

秋哥の中に　後京極摂政前太政大臣

折られぬ入日の空のむらさきのみて夕流まつふるに我る世

前大納言為氏

鶉なく野原の日数かさねては花吹こす秋の夕かせ

源師光

露むすふ花のおもひに花吹風に玉ぬきちらす秋の夕暮

後九条前内大臣家歌合に

土御門院小宰相

ゆくそらの萩の花露は袖をしほりて露けき

露落と云ことを

源済光卿

玉かさる秋のゆふ露の初花すら袖かけて秋風そ吹

貞和百首歌に

前中納言為忠

こそ袖をかりて虫の聲はあはれもよはりまさるらん

秋夕を

侍従為敦

うれしともなにをかこちの夕そとてや今は秋のあはれをも

住吉社によみてたてまつりける歌の中に

前大納言仲光

それとなき哀を虫の心とはかならしらしの夕なるらん

寛喜四年日吉社撰歌合に

源家長朝臣

よしさらは月をも秋風に払そのおもひも[illegible]の露

寶治百首歌に

正三位成實

いく秋か月ひとつ乃夕暮とちに物思ふ年もあるらん
思ひしらす

隆信朝臣

なかむれは限こき物と知りなからまたぬ秋の夕暮

鹿苑院入道前太政大臣家乃百首哥
に秋夕を

前大納言爲[illegible]

さりとはなあかき物と見る又今はの秋の夕くれ

秋哥中に

宗尊親王

そのいろとわかぬ氣色もふかさや行のへ山乃秋はゆふ暮

嘉元百首哥に

中納言爲藤

わさとにはなる月の秋なれは夕乃空に物は思ふそ
思ひしらす

伊勢

こと葉の色にも心とめて松かせに秋の夕とやせもとを

相思夕上松臺立蛬思蟬聲滿耳秋と
いふ心を

前中納言定嗣

蟬の聲虫の音みな空ゆかる松の臺乃秋の夕くれ

秋夕露を

前参議雅有

秋風よわり波はへさそはれて木のまよりあまる袖の夕露

弘安元年百首哥めされけるついてに

龜山院御製

あすか風いくらに吹にしくに秋そよくぬたとやめ袖

法性寺入道前関白家歌合に野風を

源雅光

露もくやしの原の杜風によや乃池のほとりあきそふ

百首歌の中に浅茅露

伏見院御製

庭もやあれゆく庭の浅茅原露ふかしとそ誰かたらん

文保百首歌に

三条入道前太政大臣

なれあまる秋風の露もいさちふかさを涙と虫や鳴らん

月前虫といふことを

ぬるき秋の露に草葉は埋もて虫のねは更る聖の月影

左大臣家にて三首歌よませ侍けるに

野外虫を

源将信

妹にはれの浅茅か露にしくまて末にあまる虫の声かな

夜もすからしくれにまきるなくへそ鳴て

法印義寶

なかき秋のよはやかて蓬おかて枕の下になけとも

後九条前内大臣家歌合に

前大納言伊平

蛬光のね覚と哀とや枕乃ちかくに鳴よわるらん

秋野と云ことを　　権大納言義嗣

霜結ふ野原のおさゝの枯て虫のねよわる松風そ吹

弘安百首歌に　　参議教経

嫌ふるさよの葛原に色くに信しよる松虫の声

閑聴虫と　　源義将朝臣

あはれや清の小くらの新しみや霊徳てゝにりか鶴

嘉元百首歌に　　津守国冬

いかに世ん未見しにふをきゝみぬ尾上の月はなつくとも

山月と云ことを　　前参議雅有

くる秋乃正木かつらきてかね山乃月よ松風そ吹

新玉津嶋社三十首歌に　あか心と

西園寺前内大臣女

よそにのみ雲をそみねにきゝのかたまよ山の秋の月

文治六年女御入内屏風に人家池多ある

人の月をとりてあそぶ所

前中納言定家

天津風みよし雲ゐに照月の光とうつすやどの池の

応永十四年内裏にて歌とさゝりて人々

百首の歌つかうまつりけるに禁中月と云ことを

よみ侍ける

康苑院入道前太政大臣

くもりなき雲ゐの月をみるからにちよもへぬへき秋の末かな

建武元年八月十五夜内裏にて五首哥
かうせられけるに月前秋風といふことを

前中納言公脩

雲とをき空にしらるゝ月やとは露もはらふを庭の松風

新玉津嶋社三十首哥に

祝部成光

あきらけき光そことにすみのほる神代のかけもおなし月

宝治二年百首哥めされける時湖月と
いふことをよませ給ひける

後嵯峨院御製

にほの海や志賀の浦風ふけはさやに照ます月のかけか

建仁元年八月十五夜撰哥合に湖上月明
といふことを

参議雅経

にほのうみや秋のこよひと詠ましは照月かけに浦そさへける

元亨元年九月亀山殿にて題をさくりて
人々五十首哥たてまつりけるに湖郷
月を

前大納言実教

網人のあみにこすうみのそこにも月をとてやとも宇治のかは

冷泉家扇合に　俊頼朝臣

君か代とかねてやしるくおほそらの月を契となるらん

朱雀院御時八月十五夜おほせことにて
つかうまつりける　源公忠朝臣

秋の夜の月にこゝろのうつりては時よおしつゝいと悲かり

延長元年二月内裏にてうへのをのこともに
歌つかうまつりける次に月秋友といふことをよ
ませ給ひける　後光厳院御製

月見ても君にむかはすは妹の夜のなかきさを何になからん

九條院中宮と申ける時三条殿よりおはしま
してそのはしにかくて月あかく見給ける時　大納言成道

はしよりは曇なき秋の月かけもみるへきことをよむらんか

田家見月といふことをよませ給ける　後鳥羽院御製

宿ちかき山田の庵の稲葉越ましさきにこゑて月をみるらん

松月を　法印浄弁

いく秋か我ちかきまてやまのへの杉本の松の月をみるらん

月前眺望といふことを　永福門院右京大夫

秋の月山のは出てたゞよへる峯のしら雲に影ぞさやけき

水郷月と　　権中納言雅縁

見わたせば山路をみぎはにながめてもわすれぬ里と月やすむらん

月前水中に　　前大僧正果守

河水のおりて世をすむ夜な夜な誰とみるせば山のはの月

山階入道左大臣

曇なき月をますみの鏡山峯に影てこほる秋のよ

住吉社によみてたてまつりける中に

海月と　　源義種

おほ河瀬に秋ふけて住吉の松のしづえに月ぞよすらん

百首歌たてまつりし時浦月

左大臣

月影のやどをつりける浦風はなにと秋ぞしほじの松

おなじ心を　　法印経賢

あま人のなる秋いるゝてすむ月の影のこやとは浦風のみ治

應永十六年八月十五夜内裏にて人々題を

さぐりて歌つかうまつりけるに湊月

漁父と云ことを　　藤原為衡朝臣

和田の原あさとふかめてすむ月の光よりかへるあまの釣舟

江月と　　権大納言入道内大臣

月影もやとりさためぬ白露の玉江の芦をはらふ風そて

月多遠情といふことを

源有宗朝臣

ゆくりなや末は樫山の峯までもおもひやらるゝ秋の月かけ

貞和百首歌に　中園入道前太政大臣

とふ鳥のあすかの里の秋の月よしも新しく今もかゝやかす

百首御歌の中に湖月

後小松院御製

嶺の松月もやゝにかたふきてみとおほしまの浦のはま風

建保二年内裏歌合に雨後月といふことを

よませ給ひける　順徳院御製

秋の夜のむらむら雲は消てそら嵐によはる月かけ

海邊ノ月を　今上御製

文よせりおきまれたまくりの煙さへなくなるしかやのあま月影

塩屋月といふことを　前参議雅有

しほ海の塩やけむりや月よりもひとへに煙そよする浦のあま

百首歌奉りし時野月

権大納言堯孝

かれにしくさの原露も更ゆくの空すみの大野の月影

月歌の中に

鎌倉右大臣

秋風よ我の袖ゆけ八重のあはれなるらん月かけさね

寛治百首歌に庭月

源俊平

さらぬだに庭のよもぎの露けさにとはれぬよはの秋の月かな

鷹司院帥

あれてとはおもひし庭の浅茅生にさひしくもあらすすめる月影

世をのかれて後月をみて

欣子内親王

我心月にすみてなかむれはいとゝくまなき峯の空哉

建保二年内裏歌合

従三位頼継

月影も我宿かほに今よりは寝覚を誰とかたらひもせん

建仁元年撰歌合に河月といふことを

皇太后宮大夫俊成

千鳥鳴河風寒み月冴て我は秋の袖までそあはれ

寂蓮法師

月さゆるこほりそてあかる山川の世ににつれなき白波

文保百首歌たてまつりける時

藤原頼房朝臣

みくもえあれゆく山の上にたゝ雨はれし尾上の空に月は出にき

建保元年撰哥合に野月露涼

如願法師

おきつゆや露と秋風吹くに袂をかすむさしのの月

百首哥奉りし時閑月

関白前太政大臣

寛平のむかしはおもはし月影になにそふるは志のふそ哀

弘安八年住吉社哥合の時江暁月を

土御門入道前内大臣

なれ来ぬる秋もおもはすすみよしのまつの若葉にやとる有明の月

涼山月といふ事をよませ給ひける

後鳥羽院御製

よゐそてあれ行宿となかむらん苔の奥よ有明の月

新玉津嶋社三千首哥より

藤原俊朝臣

ありそめぬ浮世を嫌のこころにはうきそてもこふ山の有明の月

延文百首哥に

等持院贈左大臣

みえして桂の葉に秋風にみ山の月や影そ寒し

建長三年新儀哥合に田家月と

土御門院小宰相

秋かけて庵りの志つも月やかりのおふなやの楼の琴に

正治二年石清水若宮哥合に月を

参議雅経

あまくたる神のみやゐの月をみよ千里の外のかけもあきらけし

義仁法親王月のあかゝりける夜出て内裏ちかき所にやとりて夜すから琵琶を弾し給けるをよもすからにきこしめして仰ことありける

後小松院御製

ゆきかへりなかるも月の影よりも猶そみまほしき宮のまつ風

御返し

義仁法親王

雲ゐ人のなかむる月よりひゝくや宮の外まてもきこえかよはん

題しらす

寶篋院贈左大臣

山里の秋見えの庵のさむしろにこのまもりくる有明の月

新續古今和歌集巻第五

秋歌下

最勝四天王院障子に高砂かきたる所を

前中納言定家

高砂の松はつれなき尾のへよりおのれ秋しるさをしかの聲

前参議經盛家に歌合し侍りける時鹿を
よめる

源道統朝臣

吹風も身にしむ秋の夕暮に哀をそふる鹿の聲かな

弘安百首歌たてまつりける時

式乾門院御匣

つまこふる我身ひとつの秋とてやよふかく月に鹿の鳴らん

寳治二年春日社歌合に遠鹿といふこと
を

前大納言為氏

吹をくる峯よりちかく聞ゆなり風に鹿のねちかきおちこち

よみ人しらず

住吉の遠里をのの萩落ぬかのつまさそふ鹿の聲

水無瀬殿詩歌合に山路秋行といふこと
を

参議雅經

あらしふく木の下露に鳴鹿の聲さえて行山の夕暮

建長三年影供歌合に暮山鹿

前左兵衛督教定

又嵐山のみとりよりなる庵のおもひやりなき身をなそへん

元亨元年九月亀山殿にて五首歌
うらしせしもけるに松契心を

前大納言實教

嵐山今おもふ山の緑よ松とそ千世をちきりて重ねし庵そ鳴かへ

弘長元年百首歌奉りける時庵を

後九条前内大臣

白露のおきし外面のさむしろにかはく庵や涙なるらん
色しらす

民部卿成家

しかそなくと妹のいふとこけとや外面の草に庵は鳴らん

新玉津嶋社二十首歌に庵

権大僧都良春

おもひしてぬらりとの小萩に鳴庵はあまりにしれて計そ哀なれ

永暦二年内裏歌合に

大納言経信

ほとゝきすなかやけとはゝ独やおもふらんその草ふ

秋歌の中に

前大納言隆直

たか秋の尾上の月に松ふけて松風ちかく庵そなるなる

田家といふことを

誉徳院緒左大臣

伏見山ふもとの山田のいほりそに松風寒しさとの夕暮

弘安百首哥に　静仁法親王

夕霧の杉てもかくしぬ田の出て宿さえまへは雁そ鳴

山田の心をよませ給ひける

花山院御製

山田守人はいはねにもきえぬ時そともなく拙とこそ見へ

題しらず　柿本人麿

恋つゝもいなはの露にぬれてとりくもおすれ秋の夕せ

多々良持世朝臣

峯におふる松もとしやふるまてに稲葉の風の夕暮の聲

延文百首哥奉りける時秋田を

等持院贈左大臣

夕日さす秋の山もと霧晴て門田の稲葉露そ乱るゝ

秋の哥の中に　後二條院御製

山もとのいなはの末の秋の霧ありてよそに遠

寳治百首哥に　山階入道左大臣

風寒きゝりのをちの稲葉まとかつみ雁そに山田もるらん

延文百首哥奉りける時

民部卿為明

稲葉吹風にてそてまさらぬ日も夕暮の哀なりけり

千五百番哥合に　大蔵卿有家

みよしのゝあのむとゝもゐなれ玉つさをとりて秋をまて霧はさぬらん

新玉津嶋社三十六番哥に　藤原為邦朝臣

そこはかと出てくる雁のたれか別やたまつきみらん待らん

貞和百首哥たてまつりけるに　進子内親王

霧はれて朝日さしそふ山のはの雲にきえ行初雁の声

建長三年九月影供哥合に霧間雁　前左兵衛督教定

秋霧の麓をよこきる山のはを越えてそきこゆる雁のひとつら

湊畔雁といふことを　前参議雅有

みなと風夕しほちかき松かけの入江の浪にねふるかりかね

文保百首哥に　三條入道前太政大臣

初雁もこゑきこゆなり志てるなるなかねにかよふ秋の浦浪

後照念院関白太政大臣

風寒き老のねさめに霧はれて秋をきゝぬる夜半の雁かね

百首哥たてまつりける時　前大僧正満済

雲ゐにふるの激しおちそひぬ衰我らこそ老のね覚よ

寛治百首歌に　従二位行家

身にしむく秋風吹ぬむしこそ衣うつ金と鶴ハ鳴なる

田上鶴と云ことを　源頼之朝臣

ゆふやみの田面によする鶴なきの稲葉に結ぶ露ぞ峯

嘉元百首歌に　贈従三位為子

物思ふ雲居にこゑ鳴なきて打しものほのさき嫌ひなり金

思ひしらず　前大僧正道慶

かくれなきみやまの山田に鶴鳴て夕日まつ枝のむらたち

延文百首歌に　持家

寶篋院贈左大臣

芦のはにをともさむくなる浦風の難波のこやハ衣うつ也

進子内親王

衣うつおとはさえゆく夜寒にて鳴なる寒き霜におきゐて　たゝくしんを

前関白左大臣

長き夜の在明の月をみ夜もすから枕にうつ衣哉

新玉津嶋社三十首歌に

前中納言定家

さ夜深て砧の音は更ゆくハ雁よ志のふ衣うつらん

藤原俊顕朝臣

いかにせむ家ゐつゝや松風や里とハかはらて秋そかなしき
廿首歌めされけるついてに擣衣何方といふ
ことをよませ給ひける　後小松院御製
くさ枕旅の衣をうつ音ハいつこなる里とさためかね
永和百首歌に擣衣
権中納言為重
こゑよひと待も契れ来そしやたのめしまゝに衣うつらん
むかしの心を
頓宗法師
さ夜衣いつかおそきて弟も来しらん古郷の秋のよ寒に
百首の歌めされし時
源持之朝臣
里人ハ月そふ衣を打侘て我ゆく秋も夜もしらぬとや
たゝ大臣家の三十首の歌よませ給ひし時
里擣衣を
権中納言雅世
浦風もわかむかふ秋やさむからむ里に衣うつらむ也
西園百首歌よ
従二位家隆
里ハみなそらに雨に落すれ遠きも源ゝに衣うつらん
擣衣歌といふことを
源持元
よし秋さてや人なし小夜の浅茅か露に衣うつらん

百首歌たてまつりし時

前大僧正義運

まさ原の秋の夕されは袖の露ひともあへす鹿
鳴しらす

前大納言為家

よそ人のしらぬ秋風に鹿鳴てこゝろの里は妻こふなり

千五百番歌合のとき

後京極摂政前太政大臣

から人のたてそふ山科の木幡の里の鹿の妻声

百首御歌の中に

順徳院御製

山鳥の尾ろも鹿やさそふらんやへ山寄の中のつまこひ

貞和百首歌に

前大納言公泰

小倉山麓の野も袖みてて夜をしのふ鹿の音すなり

延文百首歌に

後普光園院入道前関白太政大臣

時しらぬ松の梢に立そひて秋をしれとや峰の鹿なり

前大納言為定

蔦の葉はてらす夕日に色ゝかはる山もと宿や鹿の鳴まて

貞治百首歌に

太宰権帥為経

旅人のおは坂山は鹿こゑて物もとゝもわかぬころかな

新玉津嶋社に奉りける歌の中に山鹿
といふ事を

権中納言雅縁

けさは猶そ乃色ともみす霧の下にかくれてさを鹿の声

秋哥乃中に　法印堯運

わけいれは山路の霧のへたてより独まよふ峰の白雲

堀河院御時百首哥たてまつりけるに

修理大夫顕季

白浪の音はかりしてみえぬ霧にふかき玉川乃里

建仁元年三月哥合に湖上暁霧といふ

ことをよませ給ひける

後鳥羽院御製

志かのうらやおきつ浪をきさは霧こめて秋もおほろの在明の月

海邊霧と

なにはかた磯への浪乃音すなり夕霧にみする秋のおきつせ

建保名所百首哥よ

前中納言定家

りかひのあともみえ沖乃友舟を行くへたとる秋の夕霧

百首哥奉りし時

權大納言實量

秋霧にまよふ鴻乃つてそゆふこともみえぬ嵐かな

貞和百首哥よ

中務大輔宗母

鴫乃うつ羽音もきくに絶にけり刈田の面は霧やこむらん

小鷹狩をよませ給ける

順徳院御製

こし鷹のわさらぬ今て小鳥をとるの秋の狩人

野草欲枯といふことを

式部卿邦省親王

初霜のむすふを待て真萩原色うつりてそ秋そ見えける

建保三年六月歌合に行路秋

如願法師

旅衣たちゐもしらぬ草枕篠の葉分にひとりしら露

應安六年九月十三夜三首講せられけり時菊籬月といふことをよませ給ける

後光厳院御製

うつろふとみるをうつして白菊の籬や月の色にそみなん

權大納言為遠

わきてみる月をわか宿よそにやりうつろふ菊の籬とそ見れ

久安百首歌に

藤原清輔朝臣

限あれはかれゆくのへのくさはみなかれにしものを白菊の花

延喜十三年菊合に

坂上是則

浪とのみひとつにみゆる江の浦風はこふ白菊の花

菊をよめる　凡河内躬恒

おしなへて秋のこゝやみむ菊乃花うつろひぬなこむ色か

家にて人々題をさくりて五十首歌よみ
侍けるに秋菊句といふ事を　普光園院入道前太政大臣

花をみし籬も今はかれはてゝ霜に匂へるきく乃一もと

弘安百首歌に　後嵯峨院大納言典侍

なく霜にうつろふとやおもふらむ色かはりゆく白菊の花

百首歌の中に菊を　土御門院御製

誰ゆへにうつろはむとか初霜のあさ〳〵にをけ白菊の花

建保二年六月歌合に行路秋　後久我太政大臣

草枕ゆふへり夜をかさねにけりそての露も色かはりけり

秋歌の中に　紀貫之

なかしとも思ひねはこそ山もとは蟲もしのひて鳴をり

旅虫を　後京極摂政前太政大臣

出てこし人へかへてゐぬ野の風よ旅の衣のあさき

水無瀬殿詩歌合に山路蝉といふことを　皇太后宮大夫俊成女

しらぬ梢をゆくか立田山梢に秋の色をみそめて

文保百首歌に　藤原経房朝臣

あらしやはらふの杜の夕時雨いかに深てか色に出なん

後光厳院に紅葉十首歌めされける時

初見紅葉　権大納言為遠

わかえとわくそとやりしまでや深からぬ秋の紅葉は

夕紅葉といふことを

入道一品親王永助

松風はもみちの錦いとへけりとも紅葉にあかぬ夕くれの空

最勝四天王院障子に安達原

前中納言定家

しをれけりあたちか原のをすゝきはまた深そめぬ秋そいろも

貞和百首歌に　正二位隆教

深からぬ紅葉の色の錦日山嶺くもみて宇治の川浪

後光厳院に紅葉十首歌めされける次に紅葉交松

といふことをよませ給ける

後光厳院御製

深のこす色もかはらぬ松の緑ともみなもみち葉そ

二品法親王覚誉家五十首歌に

法印経賢

山姫や染のこすらん紅葉の陰よりおつる瀧の白いと

正治百首歌に　飛鳥井雅経

そめかけしやけふも立田姫あらし吹てふ秋の木すゑに

前参議経盛家歌合し侍ける時紅葉

刑部卿頼輔

色ふかきやしほの岡の紅葉はゝ人をもともに染てみゆるかな

後光厳院に紅葉十首歌めされける時夕

打紅葉といふ事をよませ給ける

後福光園摂政前太政大臣

あさ日かけにほひてやかてほしきもせぬ山の紅葉

たなし時他家紅葉

後八条入道内大臣

君のこやあすをもみむさのちの梢は山の紅葉

紅葉留人　兵部卿長経

立よれは紅葉の陰の色そへて心をとむる旅のやとかな

月照紅葉　侍従為敦

家かけて月も木かくれつる山の下てる色と紅葉てらす

百首歌よみてまつりし時枯紅葉

前大僧正義賢

紅葉はゝちる白露の枯のいろしきをあはれともやみそうめん

雅永朝臣

この比は霧も時雨もひまそなきさそ木枯の杜のもみち葉

建長三年影供歌合に行路紅葉といふことを

皇太后宮大夫俊成女

時雨行嵯峨の山ちは紅葉ぬるふみ分やすくかへるらん

色みなまさりける山里のもみちを　弾正尹忠房親王の家にてよみし歌侍て秋の枝

よつまてこし嵯峨もろやこれは海ねこしてうつし宿のもみち葉とおりけるとは

後宇多院宰相典侍

みし秋よ色こそまされ紅葉ぬるふるゝや猶さかりなん

延文四年内裏にて人〳〵題をさくりてうたの
ことをかうまつりける時紅葉を

権大納言為遠

雲ふかくみて時雨し山そとや深き色をもいとゝ千しほ染らん

貞和百首歌に　前中納言雅孝

深山の千すゑ梢をおしなへて世は山入あけのまゝに雲そかゝる

百首歌の中に　後京極摂政前太政大臣

みよしのは雲にもあらて独色にかくるゝ峯のもみち葉

弘長元年百首歌奉りける時

前大納言為氏

から錦深くそめけりくらふの山の梢しくるゝ雅れのもみち葉

紅葉を

二品法親王尊胤

立田姫雲の衣のうすもみち葉はまさりけりあやの錦とそみる

延文百首に

権中納言為重

ときはなる時雨も何やもみち葉に深きうすきの色はみゆらん

百首歌奉りし時 枯紅葉

二品法親王道朝

時しあれは色をもとめそ河五十あまりの老その枯紅葉をもしらす

中務卿具平親王

常ならて嫌そねめり紅葉をも風の心はあらせやらん

前大僧正道意

時雨には紅葉ちらさぬ神なひのみむろの山は秋の色をうつのまこともみえとさそりて君か千世

千はうきさりけるつゝくみ三室山を

今上御製

影やとす月も時雨て三室山嫌風ましくもみち葉の露

月歌の中に

崇光院御製

長月や月さへ今は立田の影よまてなき秋の色かな

後京極摂政太政大臣家の歌合に

暮秋　　　　大蔵卿有家

長月もいく有明になりぬらん蛛蓋ふる露もおきまよふらん

　　　　　寂蓮法師

暮てゆく秋の名残も山の端に入月とゝもにや在明の空

　　貞和百首歌に　前中納言為秀

関守もとゝめぬ日数に移り来て在明の月はなきすまの浦波

　　久安百首歌奉りける時

　　　　　皇太后宮大夫俊成

けふのみと霜をきさそふ秋はつゝきさ秋のかくこそ

　　寛治百首歌に　太宰権帥為経

長月はのこりすくなき夜になりし日数によわる秋かな

　　暮秋の心を　按察使資明

暮ぬとも秋はむしこそおもはれて野の日にいくかのさこさ野をわけ

　　文保百首歌に　中納言為藤

嵐も山も霜をさそひてゆく秋の名残に添ふ袖の白露

　　百首歌奉りし時

　　　　　前摂政左大臣

秋はされあさとおもふ紅葉もしめやともとゝめて秋やかへらん

　　　　　左衛門督實雅

うつろふ萩原のまくすを吹風よ心とそや秋もゆくらん

延文百首歌に九月盡のこゝろを
前大納言實名
かきりあれは秋もとなかつ月のこりしたもとかけて
して秋はいぬめり

新續古今和歌集巻第六

冬歌

嵯峨山にしめの會　源道濟
冬きぬとふかりに山里はいとゝさひしく峯まけの
初冬嵐といふことを
權中納言雅縁
冬きぬとさむけき小夜ふかく山ちかき山の嵐冬やきぬらん
千五百番歌合に
源家長朝臣
紅葉せし秋はいくかの山嵐よ松のみ冬をしらせけり

嘉元百首歌奉りける時初冬

法印定為

冬きぬとけさしも霜をきそふ浅茅生の末葉の風の音そさひしき

初冬時雨を　　栄仁親王

昨日まては秋のいろやれ初時雨暮しうりて冬はさひしき

百首歌めされし次に時雨をよませ給うける

今上御製

村時雨ふりくるみえて山のはに猶さしのこる夕日なりけるかな

正治二年新宮歌合に山時雨といふことを

よませ給ひける

後鳥羽院御製

立田山梢の紅葉秋くれてつれなき松にうつしぬる

貞和二年百首歌奉りける時

中園入道前太政大臣

そつゆに何とならん冬向のもみち葉は色もかはらし

新玉津嶋社三十首歌奉り時雨

宗久法師

立かへる秋の名残雲にさえて又山めくる夕時雨かな

百首歌奉りし時

前大僧正道意

空ふくるね覚の床の枕よ時雨ふるかくもぬれぬ袖かな

建保三年六月哥合に曉時鳥

如願法師

うき物と思ひしられし曉の鳥よるもうらみし時鳥

嘉禎二年七月哥合に

土御門院小宰相

神無月木葉しくれしぬ時雨は夜のまに緑ぬよの松の色

正治二年百首哥奉りける時

寂蓮法師

霜ふかは殿も後らん山里と志らて時ていはゞ今もとふ

冬哥の中に

二品法親王守覚

そむかれし髪やほし葉のちるはなかとまつ時雨ふ

源通祐

正木ちるかしの末の浮雲やかた山をかけて移るらん

嘉元百首哥に落葉を

従三位為信

枝にのこす木葉ともいはゞさそふらんつよに紅葉の峯の松せ

後九条前内大臣家百首哥合に

藤原光俊朝臣

今よりは何をか梅の花ならむ色こそて思ふも木葉ちるには

新玉津嶋社三十首哥に

前中納言實遠

山姫の深しやうらん峰より後はいちしるみちもれ

法印頼詮

ふきそひける錦の嵐の結みて霜よりさきに散る紅葉かな

冬歌の中に　　権中納言實清

しぐれゆく庭の落葉に霜さえて嵐さびしき峰の

延文二年百首歌奉りける時

入道一品親王尊道

吹風のはらひもあへぬ紅葉や袖にこほれし色をみすらん

後小松院にて人々題をさぐりて五十首

歌よみ侍りけるに杜落葉を

権中納言雅縁

生田河水の秋さへ流れて木葉をくる杜の下せ

大井河逍遥よみの上落葉といふ事を

修理大夫顕季

大井川紅葉ふかく水ふかしをの山の紅葉ちるらし

住吉社によせてたてまつりける歌の中に

正三位義定

みなの川峯よりおつる紅葉もつもりて浪ぞみえぬ深き

河上落葉といふ事を

良心法師

湊河しみち吹こすこからしにくるゝあまの釣舟

正治百首哥に　従二位家隆

ふる雑は鶉にもまさる山月も木枯の庭に都むもみち

冬哥の中に　権中納言雅世

末葉のこ菊く比の山月よ重ねて冬の枯野はた

延文百首哥奉りける時　前大納言為定

袖の上に露をハ志らすやとりし月そこほりて霜と結ふ

貞和百首哥めされし次に

光厳院御製

なかそむらか西の空も霜ようまくるゝ枯の月

応永十四年内裏ニ十首哥合に寒月　後宏院贈内大臣

更ゆけハ枯野霜し浅茅生の霜よこほる冬の夜の月

権大僧都堯尋

天津空霜もみちあかる嶺よりてや月よ隣ゆ鐘の音かな

前右衛門督為盛

まてはゆく雲の浪まてかゝりさゆる霜夜の月の光に

前参議雅俊

吹風のおとにみてて秋は深て更そふ霜よおかふ月を
冬の夜半中に野冬月とみふとてよ
ませ給ける　亀山院御製
限もさえことも光もえて枯の霜よおかり吹月
冬の色を月とみるかな
雅成親王
石間の瀬つ山月やまこせふこ霜まも月の影そえて
弘安元年百首奉に
式乾門院御匣
こをやらぬ袖のおふとまでも物は思ふ園の月
影

題しらす　卜部兼数朝臣
立田の秋つもらすさ庭風留よそれと針せけそ霜
延喜十七年閏十月菊宴せさせ給ひ
ける時三條右大臣おほんかはらけとりてまつると
てたちまふになりきたまへて御かはらけ
ちをせと宣はせて奏し給けれは
延喜御製
色ふかく白ふ菊おもひらよ折りけるかなまやまらん
前栽の霜をまとふとみて
式子内親王

霜かれし千種の花は籬にも秋みしよりも哀なりけれ
正治百首御歌に　二條院讃岐
秋よ猶のなこりと留まて霜乃籬よ花とみゆる
後小松院位よおはしましける時菊をさく
つまし三十首歌よまれけるに寄て
寒草を　前大納言為季
志るしふと籬の霜の下荻やなほ世の風乃秋のけしきさと
千五百番歌合に　前中納言定家
花薄草の袂も朽はてぬなれて別し秋をこふとて
百首歌よみてたてまつりし時寒草

前大納言公雄
風寒み秋とへて霜もかれのへに結ふかれたる花の色こそすかりき
おなし心を　兼好法師
千種乃野辺の草葉は霜枯よ身にしみし色の名残はさ
後京極摂政前太政大臣家の百首歌合
に枯野を　前大僧正慈鎮
霜の色ふかうふ野辺とさそはれし哀はいまも物まそかけ
後九条内大臣家乃百首歌合に
衣笠前内大臣
浅茅原霜の下葉は枯てみまもあらぬ野辺の色かな

花しらす　平常縁

打なひく春来ぬとけてもしたなみのこほりの浅芽霞そふ

文保百首哥に　中納言為藤

なかはふかりて山陰も秋やをそき入日の跡は霧そ立

正治百首哥よみてたてまつりける時おなしく

源具親朝臣

霜のぬまに末の嵐吹たえて野寺の鐘のひゝきかな

後京極摂政太政大臣

吉野川瀬の白浪おちして岩ねよりたつ峯の吹雪

建保名所百首哥に

僧正行意

くれなゐの紅葉やおちて清瀧川のせゝに皆とき

後九条前内大臣家百首哥合に

藤原伊長朝臣

行秋はおはれひまもなけれとや紅葉山川の岩波のたん

岩氷と云ことを

後徳大寺左大臣

さえてゆく小夜嵐こそ岩水のゆくゑもみえぬおちの流

湖水と

後二条院御製

行舟やむかし山嵐さゆる日は汀おちてよる舟もなし

百首哥中に水鳥を

後京極摂政前太政大臣

こよひまた浦山をこえさわすらんその河原に千鳥鳴也

嘉元百首歌に　　前大納言経継

河風に夕ゆく月の影さえて霜よれ千鳥空になくなる

千鳥を　　権大納言為親

夕しほは鳴ねを遠にゆく千鳥又いつくにか友さそふらん

題しらす　　源時遠

風さゆるひら山やいくく源かん河瀬すきて千鳥鳴也

磯千鳥を　　正三位知家

風といへは磯こす浪のたちかへしもおちこちて立千鳥かな

建仁元年二月五十首歌に　　参議雅経

塩ちの月にむれゐる門かけ千鳥なみよる沖の音せ

千五百番歌合に

浪の上に友なき千鳥打侘て月に恨ありやの空

百首御歌の中に湊千鳥といふことを

世終けり　　伏見院御製

なきさくるこゑ湊の浦風に入江の千鳥むれてとふ也

難波の湊にて千鳥なくなりとゝて　　大納言

ゆふされは秋よりさえてさけはかりゆふくしほれ湊に千鳥鳴也

後宇多院に十首歌たてまつりける時浦
千鳥と　　　よみ侍し時

しほかせにあまのとまやのよる千鳥鳴ねにはたへや袖ぬらすらん

題しらす　　　多々良持世朝臣

さえて雪ふかきゆふ袖は浦千鳥いつはりせしよるこそはなくらん

大僧正道順

おなしき聖護院の浦にて鳴千鳥みけれはよみて侍る

永和百首歌たてまつりける時

後八条入道前内大臣

わか風にかよふともなく友千鳥ひさしきにかよふ松を

堀河院御時の百首歌に

前中納言匡房

月影に明石の浦を漕ゆく舟ハ千鳥なくにそ明ぬとやみん

題しらす　　　藤原雅経

明石かたせとの塩風さよふけて鳴くくれなく友千鳥哉

百首歌たてまつりし時

前大僧正義運

霜こかく枝秋や衰くなみまにしらぬの月に千鳥鳴

水鳥を

藤原雅親

しまてふる川瀬をさきとあさりのさかくへにそなほちるらん

貞和百首の歌に　前中納言為忠

水鳥のふさゝゐるも立ぬ蘋の花ともしらぬ秋風のけに

百首の歌たてまつりし時　権中納言宗継

池水につなかぬ舟のゆくへをもさみたれすさひたれ

あはれとはみん　権大納言實盛

よそにすら嵐吹そふ河風に小夜の霞は霜とやおきて

百首の歌たてまつりし時おなしこと

関白前太政大臣

河風にみたれし露の白玉を何そとみれは霞たちけり

左大将公名

風寒み玉ともけて瀧の上におきつるの葉にたまる霞哉

嘉元百首の歌に　法印定為

有間山をちの雲ゐは風寒て霰おちくる猪名の笹原

千五百番歌合に

前大納言忠良

秋風におもひふる程はしるきけさ乃外山の松そしる

家乃百首歌合よみ侍れしと

後京極摂政前太政大臣

風寒みかねてもみえしふる里はよしのゝ山の雪けなるらし

初雪を　権中納言雅世

白妙の真砂の上にふりそめて思ひしよりもつもる雪哉

おなし心を　法印實性

明わたる峯の梢は霜やとひなくそれとしられは雪気なりけり

百首歌奉し時浅雪　権大僧都堯孝

朝かけは浅茅か末にまかふへき咲花にひとしそみえし初雪

題しらす　恵蕚法師

おくふかき山のはにむかへは月とみしかたふきぬれは雪けなり

二品法親王覺誉家五十首歌に

法印経賢

山のはの雪の光よあくるまて移出て有明の月

雪中月　前参議雅有

ちりはむもつもりは月の光にて待ぬる庭の志ら雪

正治二年百首歌に

家隆

山ひさしとひこぬ人の心まて跡そむすへる雪の明ほの

家に三首歌よみ侍し時常盤木

雪を　たゝ臣

冬されはさえこそかはりつゝ常盤木も又かへかぬるちりつもる雪

後宇多院に十首哥たてまつりけるとき

松上雪　　按察使公敏

ゆふくれの嵐にきえし雪にこそおもはぬ峯の松かえ

左大臣家にて侍りける新玉津嶋三十首哥

深山雪を　　藤原為之朝臣

ふかきまてさそふにもなかれ山のおくはれとさるみちはつもりつゝ

題しらす　　参議成家

しをりせし峯の梢とふき分て山路の雪に跡そしらるゝ

雪乃哥の中より

藤原雅朝

ふき分て秋ゆくこともしらぬのしをりも山路は雪ふりて

名所雪を　　菩提法師

吹おろす嵐の音もたえしまれみ杉の三輪山雪深かり

参議雅経

鶏のくる人はまたせてみよしの山杉の梢の雪のしをれ

百首哥の中に雪を

土御門院御製

芳野山けさふる雪や流りけん人ゝの跡もあとなきにし

冬哥の中に

曽祢好忠

榊葉もとりにゆくへき外山の谷は雪や埋まるらん

雪満群山といふことを

前大納言親雅

降はやまさけ山かせさへて為つ隠すつもる雪かな

贈従二位為子

雪ふれはをそこゆる境山旅ゆふ旅の末も面け越しらす

式部卿邦省親王家小督

かきくらす山峯の横雲みてぬれそ開のこゑさへ雪ふりけり

山雪といふ事を

徳大寺右大臣

夕暮は浦風寒しあまを舟と渡る山ふもとは雪そふるらし

新玉津嶋社三十首歌に雪

前大僧正良瑜

けぬかうへにまたふりおきて吉野山雪はふかくも嵐をた

嘉久元年七月百首に枯間雪

従二位行家

同しく嵐風まてそ吹れはゆる生田の杜の雪のした道

後宇多院に十首歌奉りける時聖経雪

弾正尹忠房親王

白妙乃野原の雪に折ゆきかへの袖ましらせおもひし心と

前大納言實教

旅人の朝立跡やかくるらん跡もみえねは野への志ら雪

雪の歌の中に　順徳院御製

なかめやる里には人の跡たえて野中の松に雪ふりつゝ

元亨三年亀山殿千首歌に

式部卿邦省親王

大井川かよふ人は消やらて雪にかさなる世せさえ〳〵

応永十四年内裏三首歌合に浦雪

後三条入道前太政大臣

白浪の寄りこゆる松かえして雪そかゝるすさの浦也

小槻兼治

さゝ浪や釣するあまの袖まても雪ふきかくる志かの浦風

祝部成胤

打よするおきつ白浪かきくれて雪になりゆく浦風そふく

住吉社によみてたてまつりける歌の中に

大納言重光

紀の海やおきつ浪まの雲晴て雪にかゝれる浦の松原

海辺松雪といふことを

藤原雅永朝臣

雪ふかきいはねの松原うつもれて志らぬもひとつ松のしつえけさ

延文百首歌に雪を

入道一品親王尊円

浮雲のさそすおりもとも山ふく風にあらそふ袖のしづく

後深心院前関白左大臣

今は分て思ひし袖はいとゞ露をとふ涙を露にやつれ

正治二年石清水若宮歌合

藻璧門院但馬

行ぬべき人めもまれの山里に橘さへも庭の木の葉

貞和百首哥奉りける時

前大納言直義

来ふかき同人をしく小はらの奥に(?)なる宿のさびしさ

嘉元百首哥よ　中納言為藤

よし行は霜をしめて也いそくにも(?)ゆく人の苦を世に

宮庭にて九節の秋いそ(?)行え(?)もの

まよ

後深草院弁内侍

霜露もしらずこゝろん百敷やふるきみゆきの跡の跡

冬の中に

前中納言宗重

雲ゐ(?)にはあまりにもえゝし女子のかさゝの袖に露ぞ(?)

伏見院に三十首哥奉りけるを

時

永福門院

紅葉の色の世は秋ともみつや庭の木の影に遠き(?)

後小松院にて人々題をさぐりて五十首
歌よませられけるに思寄鶴といふ事を
権中納言雅縁
和蘆の乎とへも忘れてやさしきの鶴は川辺へて出る時人

後九條前内大臣家百首歌合に
按察使親綱
いく世経にゐるふしみてやさしきの鶴をもまたえゝ賀

永和二年百首歌めされけるに寄鶴祝を
後圓融院御製
みちせ経る鶴の鏡昔をいひつさぬ世にも松やまもん

おなし心をよませ給ひける
崇光院御製
みちせふる鶴の齢を今は世にあまれかしける宮のふみち

延文百首歌に
権中納言為重
雲ふかきかける雛子にふしあそそとしもる鶴の林の聲

建保名所百首歌めされける時
前参議忠定
あし鶴のねらひけにふ玉あてゝみの原にも霧立つ

文保百首歌に
弾正尹忠房親王
若鶴のたちふさのかへをとかしゝそれ翁をは住まてあかつきそよ

後宇多院に十首歌奉りける時

前大納言経継

よみすまの螢ハ雲に立そひて空にしらるゝ天の河星

民部卿為明

空さゆる高根の雲をよみわたる海の網よ海ふ大わたの山

百首御歌の中に歳暮をとよませ給ひける

土御門院御製

よそにてもさひしとしらむ大空や螢とみえぬすゝの星

弘安百首歌の中に

藤原俊定朝臣

よみすまの螢と星のみなかみそしらぬにもしられさそふ山もと

正治百首歌に

後京極摂政太政大臣

かきくらす峯のふもとにさそはれて螢の末そもえわかれける

百首御歌の中に歳暮の心をよませ給ひける

伏見院御製

いそくへき春の心もしらぬ身ハのとかに送る年の暮かな
とふくとと

後宇多院に十首歌奉りける時歳暮心

二品法親王覚助

世の人のいそくハ春のためなれとしところや年かへるらん

永和百首歌中に歳暮

深守法親王

みやこ人ひのくま河乃年に寄るもふ駒のしはせと思
れなし心と

欽子内親王

あらしとそひふ乃末の松老に波こすやまもこえなれ

前大納言實家

暮ても年は秋月につもり来ぬ九十ぬ独は月見むなり

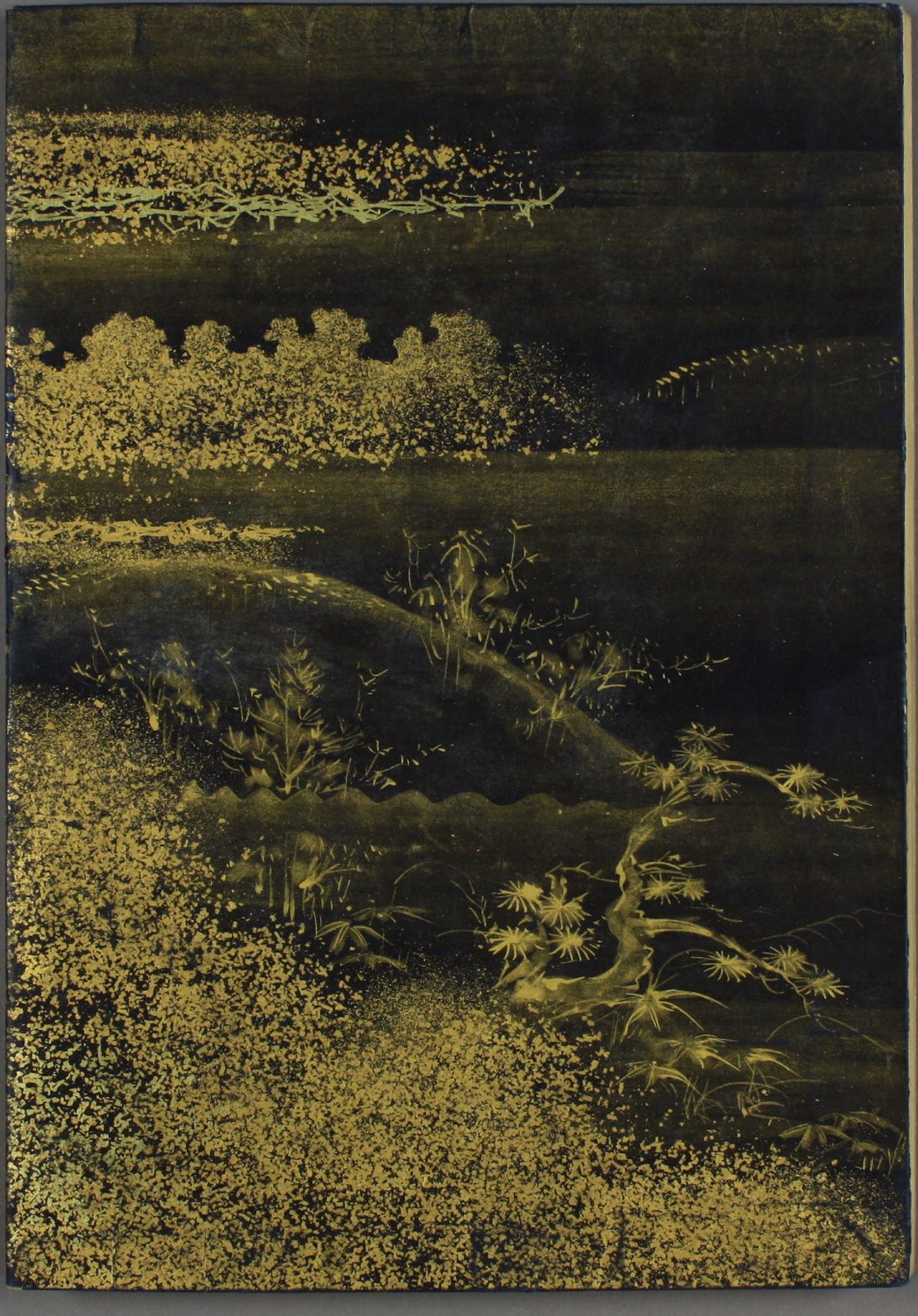
法印守遍

ひるしやまやそや七十にみちのくのおもちの末まち老は次ふとも

法印慶運

限なく老ぬる後の一とせは月につもりとゝもよそや歎

貞和百首奉りけり

中園入道前太政大臣

かくて猶ゆくとしなみもあはれ月に今いく
あひかこゝろえんとすらん